掌典 宮地嚴夫
掌典 佐伯有義 校閲 神崎一作
梁川保嘉 編纂

改定 祭典式作法

皇學會發行

特23
14

祭典式作法

例言

一祭典式及その作法を記したるもの古來全くこれなきにあらざれども多くは諸家禮式の中に於てこれに應用せらるべきものを說きたるに過ぎず此等を綜合して完全なる祭式作法に組織し一部の書となしたるは權田直助翁の祭典式その重なるものなるべし本會曾て本書を刊行し普く世上に頒ちたるより漸次神職諸君の注意を惹き爲に祭式一定の氣運を開き翁の祭式の各神社に用ひられたるもの全國中殆ど過半に達せり皇典講究所夙に禮典部を設け講師故山田有年君その該博の知見を以て祭式を創定し宮地嚴夫君亦その經驗と學殖とを以てこれを修補し頃者講師青戸波江君又更にこれをして組織的ならしめその年々皇典講究所に於て開かるゝ祭式講習會に於て君の授業を受けたるもの今や殆ど全國に遍からんとす祭式の相尋いて普及せらるゝに至れる蓋し權田翁の著亦與かりて力ありと謂ふべし本會のこの書を刊行したる前に祭典式を出版したる緣故により翁の志を成さん爲に外ならず

一本書は東京府神職管理所に於て皇典講究所の方式に據り神職普通の祭式を標準

特23
14

改定 祭典式作法

宮地嚴夫
神崎一作
校閲
梁川保嘉 編纂
佐伯有義 標題

皇學會發行

祭典式作法

例言

祭典式及その作法を記したるもの古來全くこれなきにあらざれども多くは諸家の禮式の中に於てこれに應用せらるべきものを說きたるに過ぎず此等を綜合して完全なる祭式作法に組織し一部の書となしたるは權田直助翁の祭典式その重なるものなるべし本會會員本書を刊行し普く世上に頒ちたるより漸次神職諸君の注意を惹き爲に祭式定の氣運を開き翁の祭式の各神社に用ひられたるもの全國中殆ど過半に達せり皇典講究所夙に禮典部を設け講師故山田有年君その該博の知見を以て祭式を創定し宮地嚴夫君亦その經驗と學殖とを以てこれを修補し頃者講師青戸波江君又更にこれをして組織的ならしめその年々皇典講究所に於て開かるゝ祭式講習會に於て君の授業を受けたるもの今や殆と全國に遍からんとす祭式の相尋いて普及せらるゝに至れる蓋し權田翁の著亦與かりて力ありと謂ふべし本會のこの書を刊行したる前に祭典式を出版したる緣故により翁の志を成さん爲に外ならず

一本書は東京府神職管理所に於て皇典講究所の方式に據り神職普通の祭式を標準

明治
40 12 10
内交

としこれが講習を開きたる際宮地佐伯両掌典の監理教授せられたるものを記述編纂したるものなり

一祭式一定の氣運は今や皇典講究所をして亦祭式の書を出さしめんとするに至りぬ本書はこれに比して素より完全なるを期せず唯講習の便を圖り此等の書と両々相待ちて祭式を容易に會得せしめんが爲に力めて實際的に編述し講習者の用意の爲には欄外に書入の餘白を存せり故に本書はこれに依りて直に祭式を自修するを得べく講習を受くるに際しては宜しく本書記載外の細密なる事項及自己の心覺とすべき事柄はこの欄に記入し他日の備忘に供せらるべきなり

一讀者に對して深く謝せざるべからざるは編者の不注意より挿圖の不完全なりしこと是れなり此種の圖はその實際に於ける擧止屈折の形容既に普通書工の難しとする所なるに種々の事情の爲に出版後れ讀者の督促頻なるより他日の改訂を期して諸君の補正を請ふことゝせり即ち座拜及正座の笏の持方奉幣式の幣及その持方案の脚等その重なるものなるが畢竟參考の爲の圖なれば本文記述の意味により大躰據るべき所を察し粗漏の罪は寛恕せられんことを望む

編者識す

祭典式作法

目次

一　祭典の準備　一頁
二　神饌の調理　二頁
三　服裝　四頁
四　祭員名稱　七頁
五　座席　八頁
六　作法一
　笏法
　一　持笏　十頁
　二　置笏　十二頁
　三　把笏　十三頁
　四　正笏　同頁
　五　懷笏　十四頁
　六　代笏　十五頁
七　作法二
　座法
　一　起座　十五頁
　二　著座　十六頁
　三　進む起座　十七頁
　四　退く起座　同頁
　五　進む著座　十七頁
　六　退り著座　同頁
　七　座前著座　十八頁
　八　座後著座　同頁
　九　安座　十九頁
　一〇　龜踞　同頁
　一一　跪居　同頁

一二　蹲踞　二十頁

八　作法三

立法

一　止立　二十一頁

二　列前列席　同　頁

三　列後列席　同　頁

四　磬折　二十二頁

九　作法四

歩法

一　屈行　二十二頁

二　徐歩　二十三頁

三　逆行　同　頁

四　常歩　同　頁

五　遇行左右折　同　頁

六　進行左右向止立　二十四頁

七　逆行左右折　同　頁

八　逆行左右向止立　二十五頁

九　逆行左右廻轉止立　同　頁

一〇　進行左右廻轉止立　二十六頁

一一　昇階　二十七頁

一二　降階　同　頁

一三　二人昇降階　二十八頁

一〇　作法五

膝歩法

一　膝行　二十九頁

二　膝退　同　頁

三　膝行左右廻轉　三十頁

四　膝退左右廻轉　三十一頁

五　膝行左右折　同　頁

六　膝退左右折　同　頁

一一　作法六

揖拜法

一　坐揖　三十一頁

二　立揖　三十二頁

三　沓揖　三十三頁

四　深揖　同　頁

五　座拜　同　頁

六　起拜　三十四頁

七　起拜の再拜　三十五頁

八　立拜　同　頁

九　立拜の再拜　三十六頁

一〇　同段再拜　同　頁

一一　列拜　同　頁

一二　伏拜　三十七頁

一三　平伏　同　頁

一二　作法七

拍手法

一　拍手　三十八頁

二　短手　同　頁

三　長拍手　同　頁

四　八開手　同　頁

五　連拍手　同　頁

六　合せ拍手　三十九頁

七　退手　同　頁

八　後手　三十九頁
九　忍手　同　頁
一〇　拍手度數　同　頁

一三　祭祀式

祓式

一　祭主以下祓所に著席　三十九頁
二　後取薦を布設す　四十一頁
三　後取大麻案及鹽湯案を据う　同　頁
四　後取軾を布設す　四十五頁
五　祓主祓詞を奏す　四十六頁
六　後取軾を撤す　同　頁
七　大麻行事　四十八頁
八　鹽湯行事　五十頁
九　後取案を撤す　五十一頁
一〇　後取薦を撤す　五十一頁
一一　祭主以下祓所を退く　五十二頁

一四　祭典式

祭祀式

一　祭主以下著席　五十二頁
二　後取鍵を祭主に渡す　五十四頁
三　開扉　五十五頁
四　後取薦を布設す　五十八頁
五　後取饌案を据う　同　頁
六　献饌　同　頁

七　後取軾を布設す　六十三頁
八　奉幣後取奉幣を奉幣司に渡す　六十四頁
九　奉幣行事　六十五頁
十　後取軾を撤す　六十九頁
一一　後取祝詞奏上の軾を布設す　同　頁
一二　祝詞後取祝詞を祭主に渡す　同　頁
一三　祭主祝詞を奏上す　七十頁
一四　後取軾を撤す　七十三頁
一五　後取薦を布設す　同　頁
一六　後取玉串案を据う　同　頁
一七　後取玉串を祭主に渡す　七十四頁
一八　祭主玉串を奉る　同　頁
一九　後取玉串案を撤す　七十五頁
二〇　後取薦を撤す　同　頁
二一　撤饌　七十六頁
二二　後取饌案を撤す　同　頁
二三　後取薦を撤す　同　頁
二四　閉扉　同　頁
二五　祭主鍵を後取に渡す　七十八頁
二六　祭主以下退場　同　頁

十五　直會式　七十九頁

祭式次第及祝詞

目次

元始祭次第　一頁
同祝詞　二頁
孝明天皇祭次第　三頁
祈年祭次第　六頁
同祝詞　七頁
紀元節次第　八頁
同祝詞　一〇頁
春秋皇靈祭次第　一一頁
同祝詞　一二頁
神武天皇祭次第　一四頁
同祝詞　一五頁
大祓次第　一六頁
神嘗祭次第　一八頁
同祝詞　一九頁
天長節次第　二一頁
同祝詞　二三頁
新嘗祭次第　二四頁
同祝詞　二六頁
假殿遷座祭次第　二七頁
同祝詞　二九頁
上棟祭次第　三一頁
同祝詞　三九頁

目次終

祭典式作法

神崎一作
梁川保嘉編纂

一　祭典の準備

祭事に關する心得は種々あれども、要は中心誠を存するにあり。假令ひ、祭式嚴に、作法整へるやう見ゆとも、祭に奉事する人々にして、誠心誠意ならざらんには、事業に目的精神なきが如く、その行事作業は、唯一の虚儀となり了るべし。誠心誠意は、やがて神を敬するの心となり。神を敬するの心は、やがて一事一物をも忽にせず、愼重を守る念慮ではなるなり。

祭典の準備は、先づこの心得にて始むべし。神殿、祭場の灑掃、裝飾、祭具、用度の整備調製等、豫め注意に注意を重ねたるが上に、祭事前はなほも遺漏はなきかと、深く自ら省慮し、殊に掃除拂拭は言ふも更なり、器具の整理、饌物の洗滌等は、清潔なる上にも清潔にし、思懸けぬ所に不潔の、在るものなれば、到らぬ隅なく注意に注意を加ふべし。さて神殿祭場を始め、祓場、神饌所の設備整ひたらんには、次の用意に取掛るべし

二　神饌の調理

神饌の調理には二樣あり。米、魚、鳥、海菜、野菜等を煑炊きし、器に盛りて奉ること、洗米、魚、鳥、海野菜等、生の儘、器に盛りて奉ること是れなり。されど特殊の慣例を除きては、普通煑炊きせざ

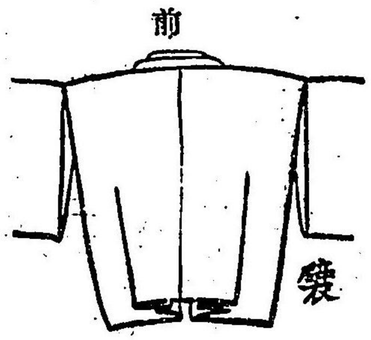
るが多し。その品目は、

(一)洗米　(二)酒　(三)餅　(四)海魚　(五)川魚　(六)野鳥　(七)水鳥　(八)海菜　(九)野菜　(十)菓　(十一)作菓　(十二)鹽水

これにて十二臺となる。されど十一臺なるときは、野鳥、水鳥の内一種を除き、十臺のときは、鳥の全部を除き、九臺のときは、鳥及び作菓を除き、八臺のときは、鳥、作菓及び餅を除く。

神饌は、神事に就いて、最重要なるものなれば、調理の任に在る者は、第一に一身を清淨にし、淨器に淨水を十分に湛へ置き、饌物は、一々洗ひ清め、又品物によりて、洗ふこと能はざるものは、清き紙、又は、清き綿にて拭ひ、或は、齋緒をかけて結ぶことあるをり、緒を緩るに、思はず唾など附けざるやう、諸事細に注意すること肝要なり。

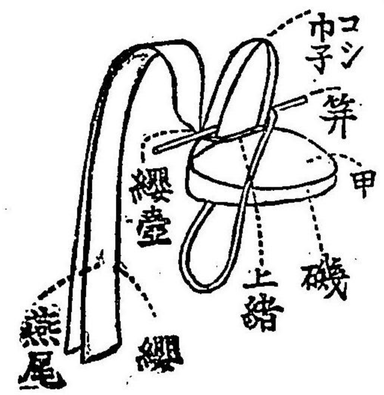
單



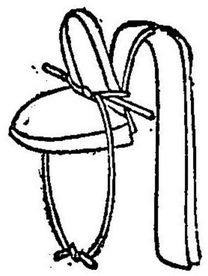
前單ノ袋ハ内ヨリ取ル

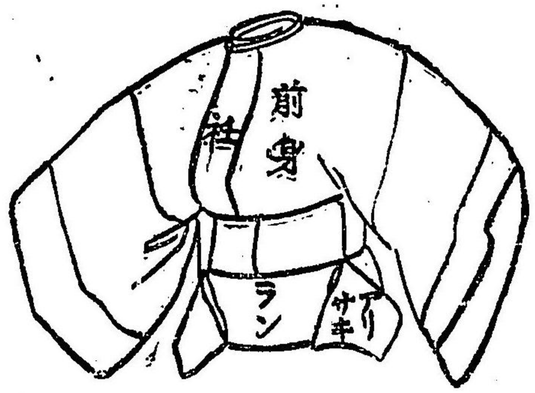
後ノ單ノ袋ハ内ヨリ取ル

冠

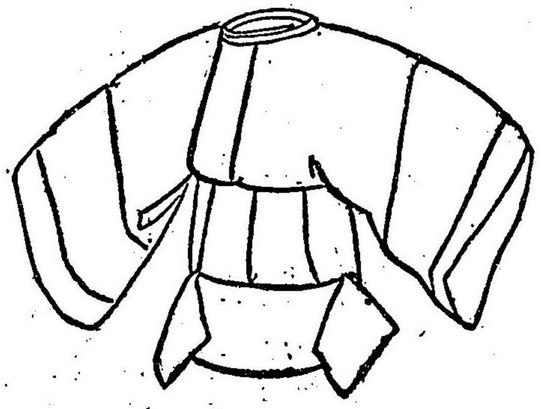


緒ハ右ヲ下ニ左ヲ上ニス

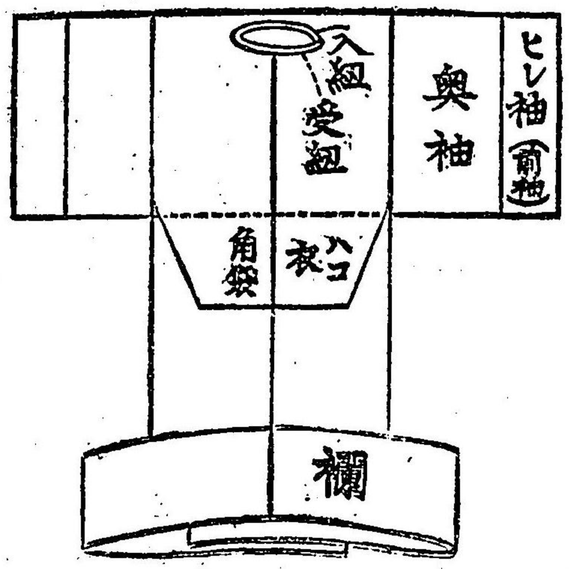




袍



袍ハ前ヲ三角形ニシ緒ハ卷込ムナリ



袍ハ大凡五尺五六寸ニシテ前身四尺後身四尺袖貳尺前袖貳尺襴八尺袴四尺五寸ハコ衣三尺貳寸小袷貳尺貳三寸ナリ

三　服装

冠は、前の方を少しく低くし、後は少しく上りめに著くべし。

袍は、襴を上ぐる程度に注意すべし。高きは卑しく見ゆるゆゑ、小紐を固く引きしめて結ぶべし。緩きときは、背ふくらかになりて見苦し。ハコ衣の上の少しく括るゝ位を善しとす。

又、のぼりのたぐみをば、下の方を扇形に、左右より折込み、裏へ折返して、帶へ固く挾込むべし。緩きときは、空拔けして不躰裁となるなり。

指貫は下括りを高くし、裾を地上より二寸許り上げて著くべし。低くして地をすり、高くして襪の多く見ゆるなどは見苦し。又、下服の裾を指貫の内にて右左ひとしく前の方へまはし、指貫の裾のふくらかになるやうにすべし。凋みたるも見苦し。

四　祭員名稱

祭員の名稱左の如し。

一、祭主
一、副祭主
一、奉司（主）
一、祓主
一、典儀（典禮）　附贊者
一、傳供長（陪膳、献饌長、手長長）
一、神饌係（膳部）

一、傳供員(手長)
一、大麻司　大麻後取　鹽湯後取　御鍵後取
一、鹽湯司
一、後取
奉弊後取　玉串後取　饌案後取　薦後取

五　座席

座席に就いて、第一に注意すべきは、席の上下なり。祭場に在りては、神座を眞向とし、この線に當る正中の處を第一位とし、神座より向ひて左の方を第二位とし、右の方を第三位とす。而して、左右両側ともに、凡べて神座の正中に近き方を上座とし、神座に遠き方を下座とす。即ち左の如し。

座席上下の圖

左	神座	右
左側	正中	右側
二	一	三

されば、正中即ち、第一位の處にて、行事をなすときは、凡べて進左、退右、起右、座左、即ち、進むときは左足より始め、退くときは右足よりし、起つときは右足より起ち、坐するときは左足より折り始むるなり。又神座に向ひて進むときは、右側の者は、中央より少しく右側に寄りて進み、左側の者は、中央より少しく左側に寄りて進むべし。

六 作法一

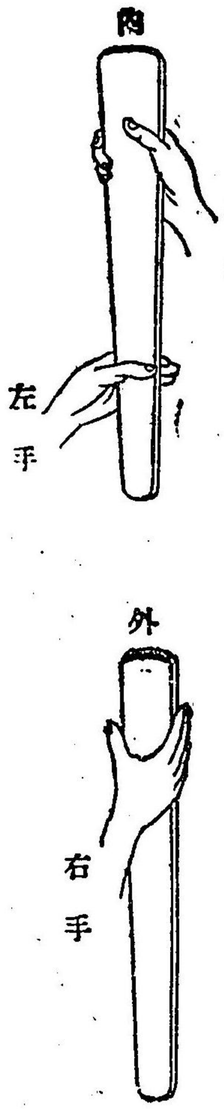
笏法

◉(一)持笏　笏を持つには、右手の拇指と小指を、笏の内にして、三指は離れず相接して外にし、笏の下部の下は、一指位の間を明け、右股の附元の處に置き、笏の本末正しく、胸部の右側に置く、左手は、全指を密着して伸し、拇指の頭を内に抑込み、中指の第三の折目の處に當て、これを笏を持てる右の手と同じく、左の股の附元に置く、目は前の方十尺の處を見る。足は正しく膝を折りて坐し、左足の拇指を右足の拇指の上に重ね膝の開き方は、膝間膝を容るといふ方、即ち、膝と膝の間に膝の入る位にし、體と鼻と腹とが、垂直になる如く正しくすべし。されど、時間久しきに亘るときは、左右の拇指を上下に組換へ、互に緩みをなすも妨なし。

持笏の圖

●(二)置笏　笏を置くときは、右手に持ちたるものを(一)左方の膝の附元の處に移し(二)左手にて、右手に握りたる笏の上部に當れる方、即ち、中央を、拇指は内に、四指は外にして把り、(三)右手をはなし、直に笏の上部、即ち、笏頭より一寸許り下を、前方より拳を圓くして把り(四)これと同時に、左手は放し、右手に持ちたる儘、笏の下部にて膝を摺るが如く右に移し、右膝の袴の下に、膝頭より一寸許り奥に挿し、中指と拇指の先

置笏の圖



を地に附け(五)笏の全部を地に置くべし。

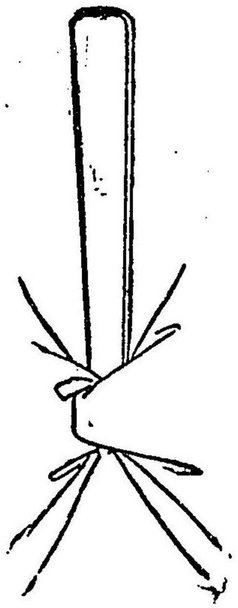
笏には表裏あり。内に向ひたる方を裏とし、外に向ひたる方を表とす。表は神前に向ふものなれば、成るべく地につけざるやう注意すべし。

●(三)把笏　この作法は(一)右手にて、笏の上部一寸位下を、中指と拇指の先にて把り(二)笏の下を袴の上を圓く摺る心持にて運び、左膝の附元に移し(三)左手を以て、笏の中央を把り、(四)右手を以て、笏の下部を把り、左手を放つと共に(五)持笏の本位、即ち、右膝の附元より二寸許り先に置くべし。

●(四)正笏　正笏は、笏を把りたるまゝ、前方體を距る七寸許りの處に持出すと同時に、左手を添へて正しく持つ。さて、笏を把りたる手の拳は、臍の邊に在るを適度とす。添へたる左

手の拇指は、右手の拇指と小指この中間に附け、その他は皆外にして、右手の指の上に重ね、笏は正しく偏せざるやうにすべし。

正笏の圖



◉(五)懷笏　これは置笏の如く(一)左手に移し(二)左手を以て、笏の中央を握り(三)更に笏頭一寸位下を、右手にて平握りに把り、同時に左手を放して、左の袵を把り(四)懷中に、袵より笏頭を二寸許り出して差込むなり。

懷中より笏を出すときは(一)左手を以て、左の袵を把ると共に、右手にて笏頭を握り、引出して(二)左膝の上に移し(三)笏の中央を左手にて握り(四)右手を以て、笏の下部を持ち(五)さて、右膝に移すなり。目は前方十尺の處を見るべし。

◉(六)代笏　時として、扇を笏に代用することあり。この折は、扇の中央を一行開きて、笏と同樣に使用すべし。

七　作法　二

座法

◉(一)起座　起つときは(一)尻を上げ、足の先を踞立て、體を踵の上に置き(二)神前の上座の足より先に起ちて、體を伸し(三)下座の足を、上座の足に引附けて、足の爪先を開き、左右の踵を接す。

神座の正中にて起つときは、常に右足より起ち、左側のときは左足より、右側のときは右側より起つなり。目は前方二十尺の處を見る。笏は持笏の儘なり。

◉(二)着座　着座は(一)上座の足先を屈し、膝頭を突き(二)下座の膝頭を突き、両足の甲を靜に地に附け、尻を踵の上に置き、持笏のときと同じ姿勢をなし、目は前方十尺の處を

着座の圖

見る。笏は持笏の儘なり。

◉(三)進む起座　進む起座は、先に起ちたる足へ、後に起ちたる足を引き附けて揃ふるなり。目は前方二十尺の處を見る。笏は持笏の儘なり。

◉(四)退く起座　退く起座は、進む起座とは反對に、後に起ちたる足へ、先に起ちたる足を引き附け揃ふるなり。着目及び笏の姿勢前に同じ。

◉(五)進む着座　進む着座は、両足の爪先を開き、踵と踵とを接したる儘に、上座の膝を先に突き着するなり。目は前方十尺、笏は持笏の儘なり。

◉(六)退り着座　退り着座は、上座の足を後に引くと同時に、膝頭を突き、直に下座の足を引き附けて着するなり。着目及

び笏の姿勢は、前に同じ。

起座、着座等は、うの折々左右面、左右側、正中等の區別に注意すべし。

◉(七)座前着座　こは(一)上座の足の膝頭を地に附け、次に下座の足の膝頭を突き、全身を踵の上に置き(二)下座の足を起て、足先は、上座の足先に斜に、膝頭より一寸許り奥に置き(三)上座の足の膝頭を立つると同時に、下座の膝頭を下げて、上座に向ひて廻轉をなし、兩膝を地に附け(四)にて座するなり。目は前方十尺、笏は持笏の儘なり。

但し、神座の左側に着するときは、左轉をなし、右側に着するときは、右轉をなすべし。

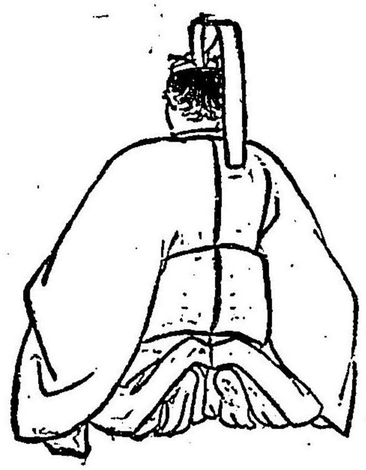
◉(八)座後着座　座後着座は(一)上座の方の膝頭を突き(二)下座の方の膝頭を突き(三)膝行して、着座すべし。目及び、笏は前に同じ。

◉(九)安座　安座は、坐して両膝を廣く左右に開き、股の内に於て、上座の方の足を前にして組むなり。こは、長坐の場合に、苦痛を免れんためにするものにて、俗に云ふ「ひざをくむ」に同じ。

◉(十)龜踞　龜踞は、平伏の姿勢にて、踵を左右に開き、足先を外に張り出し、龜の匍匐する如くするをいふなり。されど、こは現今用ふること少し。

◉(十一)跪居　跪居は、神前の遙なる所を通過するとき、上座の方の膝頭

龜踞の圖



跪居の圖

同側面の圖

を先に、下座の方の膝頭を後に突くのみなり。笏は持笏の儘にて、目は、前方十尺の處を見るべし。但し、物を持ちて神前を通過するときは、懷笏すべし。

こは神饌の献撤等にも用ふることあり。

●(十二)蹲踞　こは、止立して、尻を輕く踵の上に保ち、膝頭を水平に躰を正しくし、持笏の姿勢をなす。目は、前方十尺の處を見る。

八　作法三

立法

●(一)止立　こは立止りたるとき、體を正直にし、兩足の踵を接し、足先を開くなり。笏は持笏。目は前方二十尺の處を見る。

●(二)列前列席　上座の人の足先に、自分の足先を均一にする位の位置にて、踵と踵とを接したる儘、足先を開きて一應止立し、下座の足先を、上座の足先に斜に附けて、上座に向ひて廻轉す。笏は持笏。目は前方二十尺の處を見る。但し、正中のときは、自己の着座する方位に向ひて廻轉すべし。

●(三)列後列席　列後列席は上席の人の踵に、自分の足先を

揃へて止立し、下座の足より、足の長さ位下座の足より前に進め、前列に倣ひ止立す。目、及び笏は、前に同じ。

◉(四)磬折。　磬折は、躰の上部のみを屈し(躰形七十度)下部、即ち、腰より下は、正しくするなり。笏は、持笏の儘にす。こは、神前、及び、尊前に對する或る場合のとき、又は、行事のときにこれを用ふ。

九　作法四

歩法

◉(一)屈行。　屈行は、磬折の儘、進行するなり。庭上、又は、神前に近き處を、已むを得ず通過する場合に、膝行に代へてするなり。

◉(二)徐歩。　徐歩は、足先を少しく揭げて進む。一呼吸間に一歩とす。足と足との間は、一足容る位の間を取り、目は、前方二十尺を見。笏は持笏の儘なり。

◉(三)逆行。　逆行は、神前より退くとき、止立の姿勢より轉じて、上座の足より三歩後方に退き、更に止立の姿勢をなし、自座に向ひて廻轉し着座す。目は、前方二十尺を見。笏は持笏なり。

◉(四)常歩。　常歩は、徐歩より少しく早き歩行なり。二呼吸間に三歩位とす。

祭主副祭主は、徐歩を用ひ、他の祭官は、常歩を用ふるを適當とす。

◉(五)進行左右折。　進行して左折するには(一)左足を左方に

向け(二)右足を左方に運び、左足より進行す。目は、前方二十尺筋は、持筋とす。

右折せんとするときは(一)右足を右方に向け(二)左足を右方に運び、右足より進行す。目、筋は、前に同じ。

◉(六)進行・左・右・向・止・立・　進行して左向止立をなすときは(一)左足を左方に向け(二)右足を左方へ運び、兩足の踵を附け、足先を開く。目、筋は、上に同じ。

右向止立をなすときは(一)右足を右方に向け(二)左足を右方に運び、兩足の踵を附け、足先を開く。目、筋は、上に同じ。

◉(七)逆行・左・右・折・　逆行して左折せんとするときは(一)左足を左方に向け(二)右足を左方に運び、左足より逆行す。目、筋は、上に同じ。

逆行して右折せんとするときは(一)右足を右方に向け(二)左足を右方に運び、右足より逆行す。目、筋は、上に同じ。

◉(八)逆行・左・右・向・止・立・　逆行して左向止立をなさんとするときは(一)左足を左方に向け(二)右足を左方に運び、兩足の踵を附け、足先を開き止立す。目、筋は、上に同じ。

右向止立をなさんとするときは(一)右足を右方に向け(二)左足を右方に運び、兩足の踵を附け、足先を開き止立す。目、筋は上に同じ。

◉(九)逆行・左・右・廻轉・止・立・　逆行して右廻轉をなさんとするときは(一)右足の拇指を左足の踵に引き附け(二)右向をなし、左足の踵を右足の小指の方の先に附け、八の字形をなす(三)右足の踵をあげて、左の踵に附け、止立の姿勢をなす。目、筋は、

上に同じ。

逆行して左廻轉をなさんとするときは(一)左足の拇指を右方の踵に附け(二)左向をなし、右足の踵を左足の小指の先に附けて、八の字形をなす(三)左足の踵をあげて、右足の踵につけ、止立の姿勢をなす。目、笏は、上に同じ。

◉(一〇)進行・左右・廻轉・止立・進行して右廻轉をなすときは、(一)右方へ向くと同時に、右足の踵を左足の踵に接し、足先を開き、止立の姿勢をなす。目、笏は、上に同じ。

進行して左廻轉をなすときは(一)左方へ向くと同時に、左足の踵を右足の踵に接し、足先を開き、止立の姿勢をなす。目、笏は上に同じ。

廻轉をなすに當り、神前の中央にあるときは、左右適宜の側へ一歩退き、廻轉を行ふべし。

◉(一一)昇階・階段を昇らんとするときは、祭主神座の左側にあらば、神座の左方より昇階す。昇階のときは、神座の方に斜に左向をなし、下座の足、即ち右足より階を拾ひて進み、昇り終らば神前に向ひ、階上にて左膝を跪き、右膝を左膝の頭へ揃へ、両膝を開き、左に斜に、神前に向ひて坐するなり。

右側より昇階するときは、これと反對になすべし。但し成るべく左側に着席して、左側より昇階するを宜しとす。

◉(一二)降階・階段を降らんとするときは、神前の左側にあらば、左側を右足より先に階を踏み、下り終らば、階下にて右廻轉をなして、神前に向ひ止立し、三歩退きて右廻轉をなし、自らの座席に着す。

二人昇階の圖

祭主副祭主昇降階のときは二人共足を一段毎に揃へて昇降す

右側にあるときは、これと反對に行ふべし。目は、前方二十尺を見、笏は、持笏とす。

◉(一三)二人昇降階　二人にて昇降階を行ふときは、祭主は左側、副祭主は右側よりす。作法は凡べて、前の昇降階に同じ。

昇降階のときは、頭を少し前に下ぐる心にてあるべし。

一〇 作法 五

膝歩法

◉(一)膝行　膝行するときは、躰を屈せず正しくし(一)足先を立て、躰を踵の上に置き(二)左膝を立て、足先を右足股の中央位に進め(三)左膝を地に附け進む。このとき右膝も、少しく隨行す(四)右膝を進め地につく。このとき左膝を隨行すること上に同じ(五)次に左膝を右膝頭と同一の處に進め、足の甲を地につけ、尻を踵の上に置きて坐す。目は、前方十尺を見、笏は、持笏の儘なり。但し、これは正中のときの作法なり。

◉(二)膝退　膝行の如く躰を正直にし(一)躰を踵の上に置き、足先を立て(二)右足より少しく後に、膝先を地につけて、眞直

に引きて退く(三)左足を上の如く退け(四)右足を前の如く退く(五)左足を右足の先と一直線にし、足の甲を地につけ、尻を据うるなり。目は、前方十尺。笏は、持笏の儘にす。

但し、これは正中の作法なり。

◉(三)膝行・左右・廻轉・　左廻轉・膝行をなさんとするときは(一)右膝を立て、足先を左足の股の中央に置く(二)右膝を下げ、左膝を立て、両足の先にて左に廻轉し(三)左膝より膝行す。笏は持笏の儘。目は、前方十尺の處を見る。體は、成るべく正直にすべし。

右廻轉・膝行をなさんとするときは(一)左膝を立て、爪先を右足の膝の中央に置く(二)左膝を下げ、右膝を立て、両足の先にて右に廻轉す(三)右膝より膝行す。目、及び、笏は、上に同じ。

◉(四)膝・退・左・右・廻・轉・　これは膝行とは反對に、退きて廻轉するなり。

◉(五)膝・行・左・右・折・　膝行・左折をなすときは(一)左膝を左に向け(二)左膝より膝行す。

膝行・右折をなすときは(一)右膝を右に向け(二)右膝より膝行す。目、及び、笏は、上に同じ。

◉(六)膝・退・左・右・折・　これは、膝行と反對に、進むる膝を退けて行ふなり。

二　作法　六

揖拜法

◉(一)坐・揖・　揖は、周禮の註に、俯下手也とありて、小敬の態な

り。小敬こは、大敬に對する語にして、大敬は拜のことなり。

揖をなす場合は、左の如し。

◎座を起たんとするとき。◎座を起ちたるとき。◎座に着かんとするとき。◎座に着きたるとき。◎列に着かんとするとき。◎列に着きたるとき。◎列を退かんとするとき。◎階段を昇降のとき。◎殿舍に出入のとき。◎物品受渡のとき。◎尊前に行きて退きたるとき。

坐揖は、正笏して、笏の下部を膝の邊に當つると同時に、上躰を躰形三十五度位屈し、笏は體と地との中間に位す。その動作は、凡そ一呼吸間位とす。目は、前方十尺位を見屈したるときは、笏頭を見るべし。

●(二)立揖　作法は坐揖と同じ、少し腰を入るゝ氣味あるべし。

●(三)沓揖　作法は上に同じ。これを行ふ場合は、沓を脱かんとする前、及び、沓を履きたる後なり。

●(四)深揖　深揖は、揖より一層深くす。躰形四十度位屈す。深揖は、開扉、閉扉のとき、及び、神前に近きたるときこれを行ふ。目は、笏頭を見るべし。

●(五)座拜　座拜は、正笏をなし、笏頭を自己の目の高さま

立揖の圖

座揖の圖

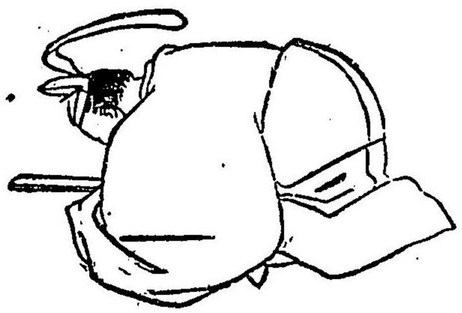
で擧げ、躰と共に拳は膝の前に接する位に、兩肱を張りてこれを下げ、笏頭は、地上より三寸の距離とし、笏と己の面との距離も、亦三寸位とし、鼻を笏の中央位の處にある樣にして、頭と躰とを一同に屈するなり。躰を屈するときは、前に岩石のあるを押し挫くが如く、重々しく徐々に下げ、體を上ぐるときも、背に岩石を載せ在るが如く、極めて徐々にし、膝先にて笏を割り持笏をなす。

屈する間は、三呼吸位にして、拳は地上に指丈け附け、肱は附けざる樣にすべし。但し手は成るべく頤に引き附けて、體と頭とを一直線にすべし。

◉(六)起拜　起拜は正笏して、右足より徐々に立ち、左足を右足に引き揃へ、躰と共に笏を正しくし、笏頭は、目の高さに上げ(一呼吸位して)右足の膝を突き、又、左足の膝を突き揃へ、兩踵の甲を地に附け、尻を兩踵の間に置くと同時に笏を下げ、膝の前に兩拳を突き兩肱を張り、躰と共に屈め、坐拜のときの如き姿勢をなし、躰を上ぐると共に、膝先にて笏を割り持笏に返る。

◉(七)起拜の再拜　起拜を二度するをいふなり。

◉(八)立拜　立拜は、直立して正笏を目と同じ高さに上げ、次に躰を座拜のときの如く屈す(躰形九十度)笏は、これと同時に、臍より三寸位前に下げ、一同に殆んど水平線迄に下げ(三



坐拜の圖

呼吸位)躰を起すと同時に、笏を正笏の位置に復し、持笏して止立の姿勢をなす。但し、躰の姿勢、膝より上は、凡べて座拝の作法に同じ。

◉(九)立拝の再拝　立拝を二度するなり。

立拝の圖

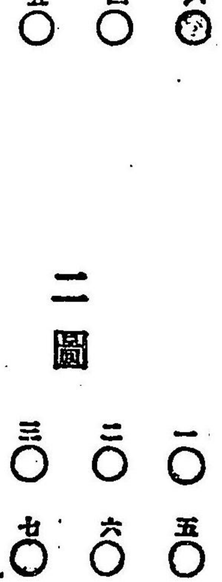
◉(一〇)両段再拝　両段再拝は、起拝を二度、座拝を二度なし、又座拝を二度、起拝を二度するなり。即ち、前後起拝座拝を四度するこゝとなる。

◉(一一)列拝　こは祭主玉串を持ち、神前の軾に進むと同時に祭員一同祭主の座後に進みて着座す。祭主玉串を奉り終

らば、祭主以下祭員一同に、立拝の再拝をなして、拍手二度、深揖一度して、祭員一同起立(下立)本座に復す。

列拝後置の圖

一圖



二圖

◉(一二)伏拝　伏拝は、正笏の儘に、笏を目の高さに上げずして拝をするなり。

◉(一三)平伏　平伏は、正笏をせず、持笏の儘にて、膝先に出すと同時に、左手を添へて、拝の姿勢をなすなり。

一二 作法七

拍手法

●(一)拍手　拍手は、普通二拍、先づ、両手を胸の前に指し出し、合掌して少しく右の指先を引き、躰の巾位に開き拍つなり。目は、手の先を見るべし。

●(二)短手(短拍手)　手の開方の狹きもの、即ち、少しく開く打方なり。

●(三)長拍手　八拍、又は、十八拍なり。

●(四)八開手　伊勢神宮にて多く用ふ。十六拍、又は三十二拍なり。

●(五)連拍手　大勢一同に拍手するをいふ。二拍なり。

●(六)合せ拍手　奉幣式のとき、奉幣司と奉幣後取とするなり。二拍。

●(七)退手　儀式を終りたる後の拍手をいふ。二拍なり。

●(八)後手　一拍なり。

●(九)忍手　葬儀のときに用ふ。音を立てずに拍つなり。

●(一〇)拍手度數　一、二、三、四、八、十六、三十二、

一三 祭典式

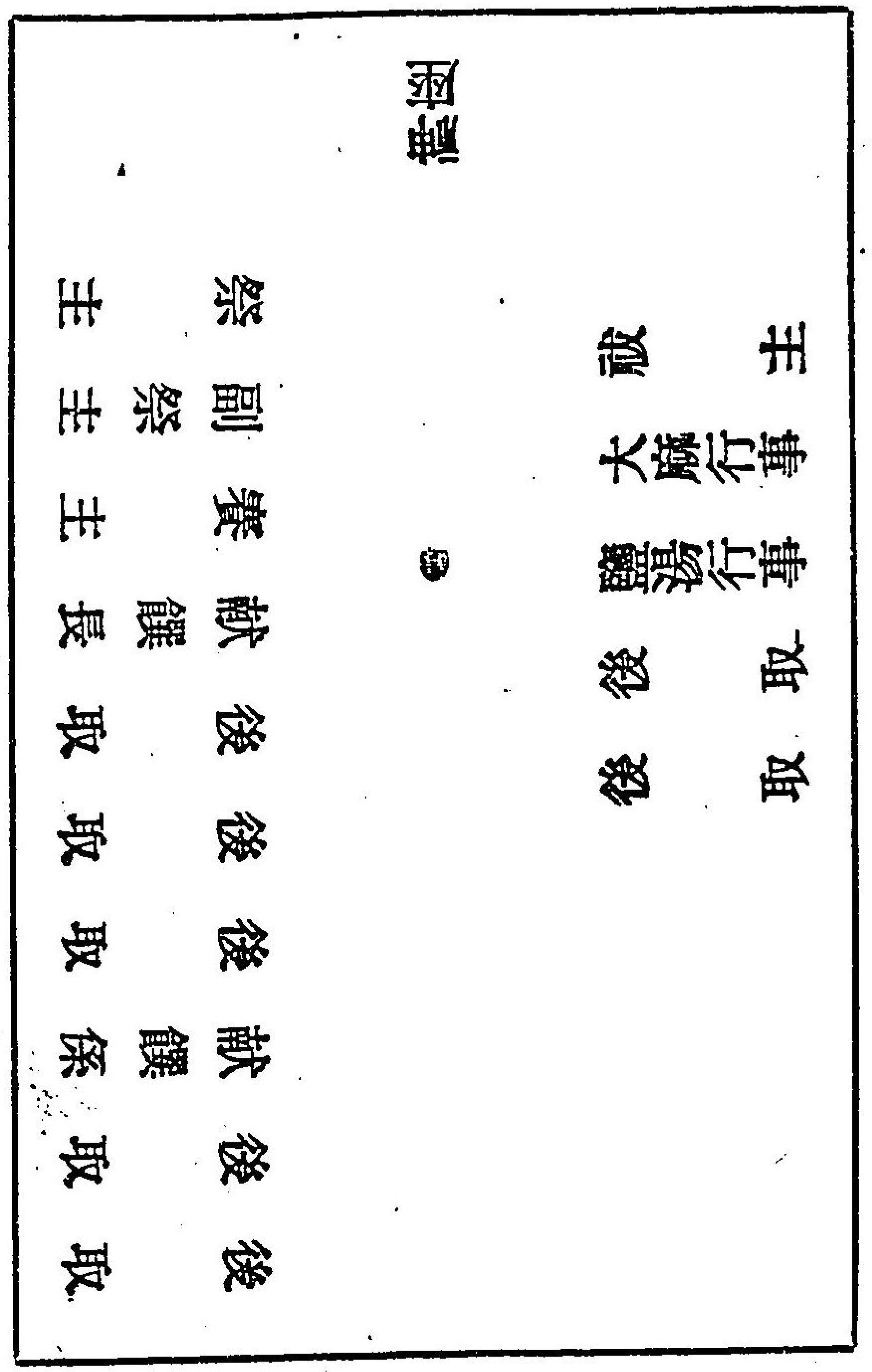
祓式

●(一)祭主以下祓所に着席す。

持笏(笏+法一)して進み、各着席すべき座に至り止立(立法二十二)し、左側の者は、左轉の座前着座(座法七十八又)をなし、右側の者は、右轉の座前

着座(同上)をなし座揖(揖拝法三十二頁)す

祓所着席の圖



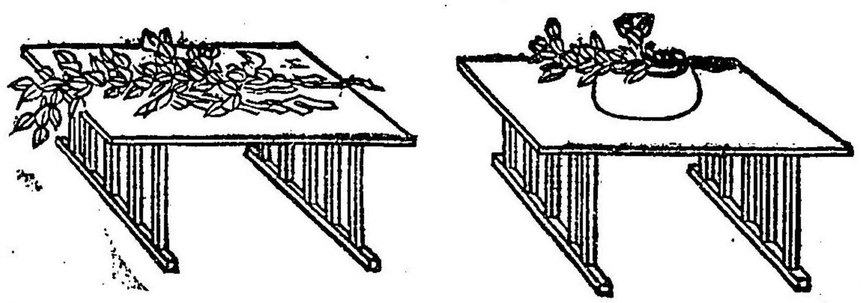
◎(二)次、後取薦を布設す。

後取二人、各座揖(揖拝法一 三十二頁)して座を起ち(座法一、三 十五頁)立揖(揖拝法二 三十二頁)して、下座の足より始め進行(歩法五、六 二十六頁)し、巻薦の場所に至り止立(立法一 二十二頁)し着座(座法二 十六頁)し、懐笏(笏法五 十四頁)して、右手より先に薦を取り、左手の甲を下に、薦の中央を持ち、右手の甲を斜に上に、薦の端を持ち、帯の所迄上げ、進む起座(座法一、三 十五頁)にて起ち、神前に進み(歩法五 二十三頁)止立(立法一 二十二頁)し着座(座法二 十六頁)し、膝行(膝歩法一 二十九頁)して、中央より左右に擴げ、横に二枚並べて敷き、膝退(膝歩法二 二十九頁)して笏を出し(笏法五 十四頁)持笏(笏法一 十頁)し、坐揖(揖拝法一 三十二頁)し、起座(座法一、四 十五頁)し、立揖(揖拝法二 三十二頁)して、逆行(歩法三 二十三頁)廻轉(歩法八 二十五頁)し、本座の前に至り、立揖(揖拝法二 三十二頁)し座前着座(座法七 十八頁)にて着座し坐揖(揖拝法一 三十二頁)す。

◎(三)次、後取大麻案、及鹽湯案を据う。

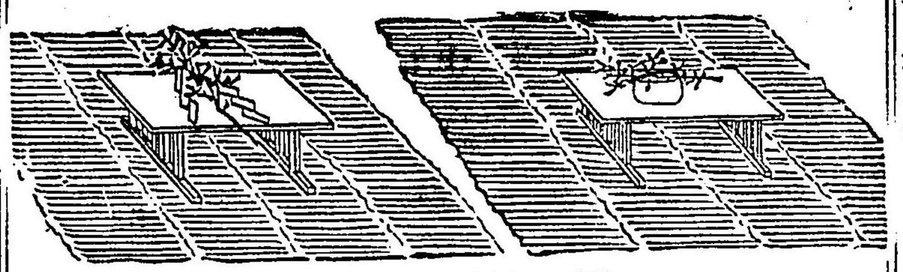
後取二人、各座揖（揖拜法一、三十一頁）して座を起ち、（座法一、十五頁）立揖（揖拜法二、三十二頁）して、下座の足より始め進行（歩法五、六、二十三頁）して、八脚机の前に至り止立（立法一、二十二頁）し着座（座法二、十六頁）し、懐笏（笏法五、十四頁）して、左手の掌にて八脚机の底の中央を持ち、右手にて机の脚の附元を、拇指のみ面板に掛け、その他の指は、脚を握りて持ち、座を起ち、（座法一、十五頁）神前に進み、（歩法五、二十三頁）止立（立法一、二十二頁）し、着座（座法二、十六頁）し、膝行（膝歩法一、二十九頁）して、机を薦の上に置き、膝退（膝歩法二、二十九頁）して、笏を出し、（笏法五、十四頁）持笏（笏法一、十頁）し、座揖（揖拜法一、三十一頁）し、起座（座法一、十五頁）し、立揖（揖拜法二、三十二頁）して逆行（歩法三、二十三頁）廻轉（歩法九、二十五頁）し、本座の前に至り、立揖（揖拜法二、三十二頁）し、座前着座（座法七、十八頁）にて着座し、座●（揖拜法一、三十一頁）す。

◎大麻は、案に倣ひ、案上に横に置きて持ち出で、神前に至り案を据ゑたる後、案の中央に眞直に置き直すなり。



大麻案及び鹽湯案を持出す圖

大麻案及び鹽湯案を神前に据ゑたる圖



主事　取
祓　大麻行事
鹽湯行事
後　後
後

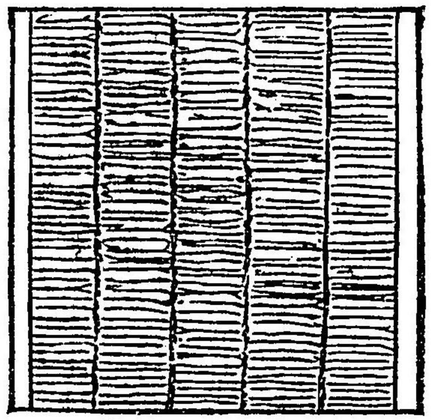
祭副　饗　献　後　後　献　後　後
祭　饌　饌
主　主　主　長　取　取　係　取　取

◉(四)次後取軾を布設す。

後取一人座揖(揖拜法二十二頁)して座を起ち(座法一十五頁)立揖(揖拜法二十二頁)して下座の足より始め進行(歩法五、六二十三頁)して、軾の置場に至り、止立(立法一二十一頁)し着座(座法二十六頁)し、懷笏(笏法五十四頁)し、薦を持つと同じく、右手より先に軾を取り、左手の甲を下に、軾の中央を持ち、右手の甲を斜に上に、軾の端を持ち、帶の所まで上げ、座を起ち(座法一、三十五頁)神前に進み(歩法五二十三頁)止立(立法一二十一頁)し着座(座法二十六頁)し、膝行(膝歩法一二十九頁)して、大麻案、鹽湯案より四五歩前の正中に布設す。これを布くには、右手にて軾の上の方を持ち、左手にて下の方を持ち、神座の左方より先に、両手にて廣げ、右方を後にす。終れば膝退(膝歩法二二十九頁)して、笏を出し(笏法五十四頁)持笏(笏法一十頁)し、座揖(揖拜法一二十一頁)し、起座(座法一、四十五頁)し、立揖(揖拜法二二十二頁)して逆行(歩法三二十三頁)廻轉(歩法九二十五頁)し、本座の前に至り、立揖(揖拜法二二十二頁)

し座前着座(座法七十八頁)にて着座し、座揖(揖拜法一十五頁)す。

軾を布きたる圖



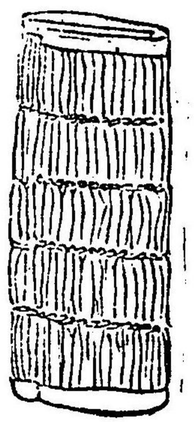
●(五)次、祓主祓詞を奏す。

祓詞を奏する式は、凡べて祝詞を奏する式に同じ。後段祝詞奏上の條を看るべし。

●(六)次、後取軾を撤す。

後取一人座揖(揖拜法一三十二頁)して座を起ち(座法一十五頁)立揖(揖拜法二三十二頁)して下座の足より始め進行(歩法五、六二十三頁)して、軾の前三歩の處に至り止立(立法一二十一頁)し着座(座法二十六頁)し、座揖(揖拜法一十五頁)して、膝行(膝歩法一二十九頁)し懐笏(笏法五十四頁)し、布くときの如く、右手にて軾の上の方を持ち、左手にて下の方を持ち、神座の左方より先に疊み、持ちて三歩膝退(膝歩法二二十九頁)し退く、起座(座法一、四十七頁)にて起ち、逆行(歩法三二十三頁)廻轉(歩法九二十六頁)し、軾を元の位置に收め、笏を出し(笏法五十四頁)持笏(笏法一十頁)し、廻轉(歩法九二十六頁)し、本座の前に至り立揖(揖拜法二三十二頁)し座前着座(座法七十八頁)にて着座し、座揖(揖拜法一十五頁)す。

軾を疊みたる圖



◉(七)次、大麻行事

大麻司座揖(揖拜法二三十二頁)して座を起ち(座法一十五頁)立揖(揖拜法二三十二頁)して、下座の足より始め進行(歩法五、六三十三頁)して、大麻案の前に着し、止立(立法一二十一頁)し、着座(座法二十六頁)し座揖(揖拜法一三十二頁)して、膝行(膝歩法一二十九頁)し、大麻を取り(右手の甲を下に、大麻の本を取り、左手の甲を下に、大麻の中部を握り)體の胸部に引き附くると同時に、右手の甲を上に、左手の甲を下にして、左手は高くし、膝退(膝歩法二二十九頁)し退く、起座(座法一十七、四頁)にて起ち、三歩退き廻轉(歩法三、九二十六頁)して、神饌所に行き、神饌案の前に至り止立(立法一二十一頁)し、着座(座法二十六頁)して神饌を祓ふ。このときは、大麻を持ち代へ、右手を上に、左手を下にし、左右左と祓ふ。祓ひ終りて、初の如く、大麻を持ち代へ、座を起ち(座法一十五頁)祓所に還り、祭主の前に至り止立(立法一二十一頁)し、着座(座法二十六頁)し、神饌を祓ひ

たるときの如く、大麻を持ち代へて、祭主を祓ひ、終れば、又、初の如く持ち代へ、座揖起座し、次に、副祭主、賽主、献饌長、後取と、順次一人毎に祓ひ、左側を祓ひ終れば、右側の祓主以下の人々を祓ふ。終れば座揖(揖拜法一二十一頁)し、起座(座法一十五頁)し、神前に向ひて進行し、案前に至りて止立(立法一二十一頁)し、着座(座法二十六頁)し、膝行(膝歩法一二十九頁)して、座揖(揖拜法一二十一頁)し、大麻を案上に置き、膝退(膝歩法二二十九頁)して、持笏(笏法一十一頁)し、深揖(揖拜法四三十三頁)して起座(座法一十五頁)し、立揖(揖拜法二三十二頁)して逆行(歩法三二十三頁)廻轉(歩法九二十五頁)し、本坐の前に至り、立揖(揖拜法二三十二頁)し、座前着座(座法七十八頁)にて着座し、座揖(揖拜法一三十二頁)す。

祭主以下の祭員は、一人毎にせずして、一同に祓ふも差支なし。

祓を受くるものは、凡べて平伏(揖拜法十三三十七頁)してこれを受く。

◎(八)次、鹽湯行事。

鹽湯司座揖(揖拜法一、三十二頁)して起ち(座法一、十五頁)立揖(揖拜法二、三十二頁)して、下座の足より始め進行(歩法五、六、二十三頁)して、鹽湯案の前に至り止立(立法一、二十二頁)し、着坐(座法二、十六頁)し、坐揖(揖拜法一、三十二頁)して膝行(膝歩法一、二十九頁)し、鹽湯器を取り、左手にて鹽湯器の底を持ち、右手の拇指を榊にかけ、他手は鹽湯器の底を持ち、坐揖(揖拜法一、三十二頁)して、膝退(膝歩法二、二十九頁)し退く、起座(座法一、十四頁)にて起ち、三歩退き、廻轉(歩法二、九、二十三頁)して神饌所に行き、神饌案の前に至り止立(立法一、二十二頁)し、着座(座法二、十六頁)して神饌を祓ふ。このときは、左手にて鹽湯器を持ち、右手にて筆を持つ如くに榊を持ち、葉の先を鹽湯に入れ、靜に上げて左右左と祓ふ。終れば元の如く、榊を鹽湯器の上に載せ、右の手を初の如くに持ち代へ、坐揖(揖拜法一、三十二頁)して座を起ち(座法一、十五頁)祓所に還り、祭主以下を祓

ふこと、大麻行事と同ト く、祓ひ終れば本座に歸る。

●(九)次、後取案を撤す。

後取二人坐揖(揖拜法一、三十二頁)して起ち(座法一、十五頁)、立揖(揖拜法二、三十二頁)して下座の足より進み、案前三歩の處に跪き、坐揖(揖拜法一、三十二頁)し、懷笏(拜法五、十五頁)して膝行(膝歩法一、二十九頁)し、左手の掌を案の底の中央に當てゝ持ち、右手にて案の脚の附元を、拇指のみ面板に掛け、その他は、脚を握りて持ち、膝退(膝歩法二、二十九頁)して起ち(座法一、四、十五頁)三歩退き廻轉(歩法三、九、二十三頁)して、元の位置に至りて案を置き、直に懷より笏を取出し(笏法五、十四頁)本座に還り、立揖(揖拜法二、三十二頁)し、座前着座(座法七、十八頁)にて着座(座法二、十六頁)し座揖(揖拜法一、三十二頁)す。

●(一〇)次、後取、薦を撤す。

作法、前の祓式(六)軾を撤するときに同じ。

◉(一一)次、祭主以下祓所を退く。

祭主以下一同退手(拍手法七三十六頁)を拍ち、座揖(揖拜法一三十一頁)し、祭主より始め起座(座法一十五頁)して立揖(揖拜法一三十二頁)し、進行廻轉(歩法一二十六頁)して順次退場す。

一四 祭典式

祭祀式

◉(一)祭主以下著席。

祭主以下祭員一同、祓所より退き終れば、直に祭場に向ふ。持笏(笏法一十頁)して進み、各着席すべき座に至り止立(立法一二十頁)し、左側の者は、左轉の座前着座(座法七十八頁)をなし、右側の者は、右轉の座前着坐(同上)をなし、坐揖(揖拜法一三十二頁)す。

祭場着席の圖

所饌幕

主典	主典	取	取
祭員	祭員	後	後

轉座

聖獸	手	手	後
祭主	饌	饌	後
主長	長	長	取

◎(二)次後取鍵を祭主に渡す。祭主之を受く。

後取懐笏(笏法五)して、鍵袋より御鍵を出し、鍵の曲りたる方を内に向け、左手を高く、手の甲を下に、右手を低く、手の甲を上にして持ち、座を起ち(座法一)進行して祭主の左脇の前、斜に三歩隔りたる處に至り止立(立法一)し、着坐(座法二)し、三歩膝行(膝歩法一)して、鍵を持ち代へ、右手を高く、甲を下に、左手を低く、甲を上に、鍵の曲りたる方を、祭主の方に向け、鍵の中部と下部とを持ち、祭主に渡す。終れば三歩膝退(膝歩法二)して、懐笏を取り出し(笏法五)、座揖(揖拜法一)して退く。起座(座法四)にて起ち、三歩退き廻轉(歩法三、九)して、本座の前に至り立揖(揖拜法二)し、座前着座(座法七)をなし、座揖(揖拜法一)す。

祭主後取より鍵を受取るには、懐笏(笏法五)して、左手の甲を下

にして高く、右手の甲を上にして低く、鍵の曲りたる方を内にし、中部と上部とを持ちて受取るなり。

◎(三)次祭主、副祭主、神前に進みて開扉をなす。後取警蹕(此間奏樂)、

祭主鍵を受取り終れば、座揖(揖拜法一)して起ち(座法一)立揖(揖拜法一)して、下座の足より進み、神前の階下にて立揖(同上)し、右足より始めて、階段を少しく斜に左向して上り(歩法十一、十三)、終れば榛上にて右膝を折り、少しく斜に左に向ひて着座(座法二)し、伏拜(揖拜法十二)し、膝行(膝歩法一)して錠を外し、鍵は扉の傍の案上に置き、副祭主と共に膝行して錠を取り外し、左の案上に置き、又膝行して神前の正面に進み、左手にて戸の下を持ち、右手を戸の上に添へ、御扉を開く、かくて起拜(揖拜法六、七)の再拜をな

し、拍手（拍手法一三十八頁）二拍、（副祭主は、此間少しく退きて平伏をなす）かくして膝退（膝歩法二二十九頁）し、左足より階段を下る（歩法十二二十八頁）下り終ると同時に、神前に向ひ、右廻轉をなし、立揖（揖拜法一三十一頁）して、左足より三歩退き、右に廻轉（歩法三、九二十三頁）して本座に至り、立揖（揖拜法一三十一頁）し座前着座（座法七十八頁）をなし、坐揖（揖拜法一三十一頁）す。

副祭主は、祭主の鍵を受取り終りたるを見、祭主の坐揖すると同時に、已れも亦座揖し、起座（座法一十五頁）して立揖（揖拜法二三十一頁）し、祭主と擧止を違へざらんやうに注意し、同時に下座の足より進み、神前の階下にて立揖（揖拜法二三十一頁）し、左足より階段を少しく斜に右向をなして上り（歩法十一、十三二十七頁）椽上にて右膝を突き、左膝を折ると同時に、斜に向き着座（座法二十五頁）し、伏拜（揖拜法一二三十七頁）をなし、懷笏（笏法五十四頁）して、祭主鍵を外し、鍵を案上に置けば、祭主と共に膝行

（膝歩法二二十九頁）して、鍵を取り、左右の案上に置き、又、祭主と共に膝行（同上）して御扉を開く、このときは、右手を上に、左手を下にして開くなり。開き終れば、膝退（膝歩法二二十九頁）して着座（座法二十六頁）し、笏を懷中より出し（笏法五十四頁）平伏（揖拜法十三三十七頁）をなし、祭主起拜終れば、祭主と共に階を下る（歩法十二二十七頁）下り終れば、神前に向ひ右廻轉をなし、立揖（揖拜法二三十二頁）して、右足より三歩退き、左廻轉（歩法三、九二十三頁）して、本座の前に至り、座前着座（座法七十八頁）をなし、座揖（揖拜法一三十一頁）す。警蹕後取は、祭主の階段を上り始めんとするときに座揖（揖拜法一三十一頁）し、起座（座法二十五頁）し、立揖（揖拜法一三十一頁）して、階下三歩の位置に着座（座法二十六頁）して座揖（揖拜法二三十一頁）す。開扉のときは、姿勢平伏（揖拜法十三三十七頁）のときの如く（体形七十度）して、目は御扉を見て警蹕をなす。聲は、始め低く終を高くす。警蹕終れば、直に座揖（揖拜法一三十一頁）して起ち（座法一十五頁）立揖（揖拜法二三十一頁）

して三歩退き、廻轉（歩法三、九、二十三頁）し本座の前に至り立揖（揖拜法一、三十一頁）し、座前着座（座法七、十八頁）をなし、座揖（揖拜法一、三十一頁）す。

警蹕後取警蹕をなすときは、階段、又は殿舍の都合により、直立して持笏のまゝなすも妨なし。

開扉のときは、祭員一同平伏（揖拜法十三、三十七頁）をなすべし。

◉（四）次、後取薦を布設す。

作法祓式（二）（四十頁）に同じ。

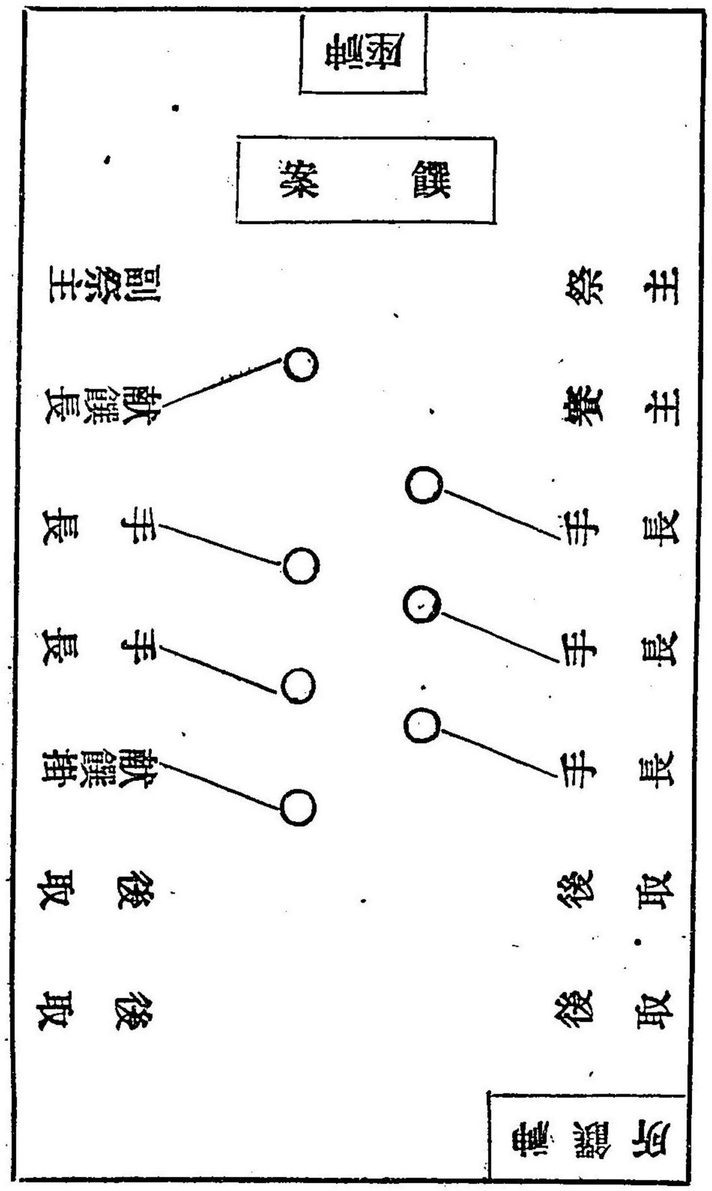
◉（五）次、後取饌案を据う。

作法祓式（三）（四十一頁）の大麻案及び鹽湯案を据うるときに同じ。

◉（六）次、献饌（此間奏樂）

薦後取薦を布設し饌案後取案を据る終れば、献饌長以下、手長、神饌係は、各座揖（揖拜法一、三十一頁）して起ち（座法一、十五頁）立揖（揖拜法二、三十一頁）し、左圖の位置に就きて着座（座法二）し、座揖（揖拜法一、三十一頁）す。

献饌配置の圖

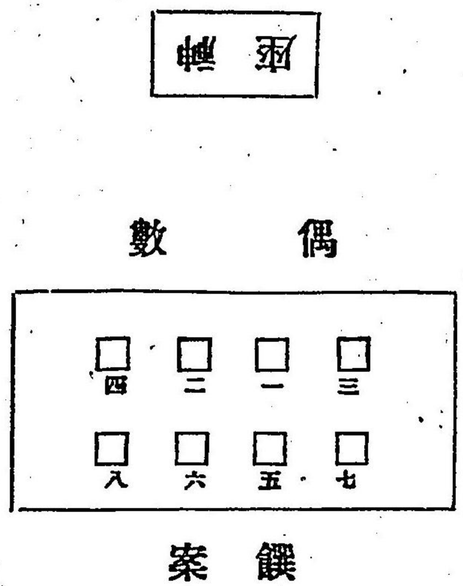


此の如く、各その位置に就き終れば、神饌係一人座揖（揖拜法一三十二頁）して起ち（座法一十五頁）、立揖（揖拜法二三十二頁）して、神饌所に進み着座（坐法二十六頁）し、懷笏（笏法五十四頁）して、傳供員の着座の樣子を見計ひ、三寶を兩手にて、拇指を緣の上と平均する位に、他の指を底に當て支へ持ち、三寶の上端を目の高さ位に捧持し、饌物の動搖して、粗忽なきやうに手長に渡す。渡す毎に目禮をなす。

手長は、神饌係立ちて神饌所に行き、獻饌長の懷笏に次ぎて、各順次懷笏（笏法五十四頁）し、平伏（揖拜法十三三十七頁）の姿勢をなす三寶を送り來れば、兩手にて受け、遞次に相渡し目禮す。獻饌長獻饌の位置に就くときは、神前の左方少し斜に着座し、神前に向ひ伏拜（揖拜法十三三十七頁）をなし、手長神饌係等着座し終れば、懷笏（笏法五十四頁）し、三寶を送り來れば、兩手にて受け、膝行（膝歩法二十九頁）して、饌案の上に靜に獻饌し、座揖（揖拜法一三十一頁）す。

獻饌は、饌物の一列、臺數偶數なるときは、左の方を先にし、右の方を後にす。奇數なるときは、中央を先にし、次に、左右交遞次供ふべし、即ち左圖の如し。

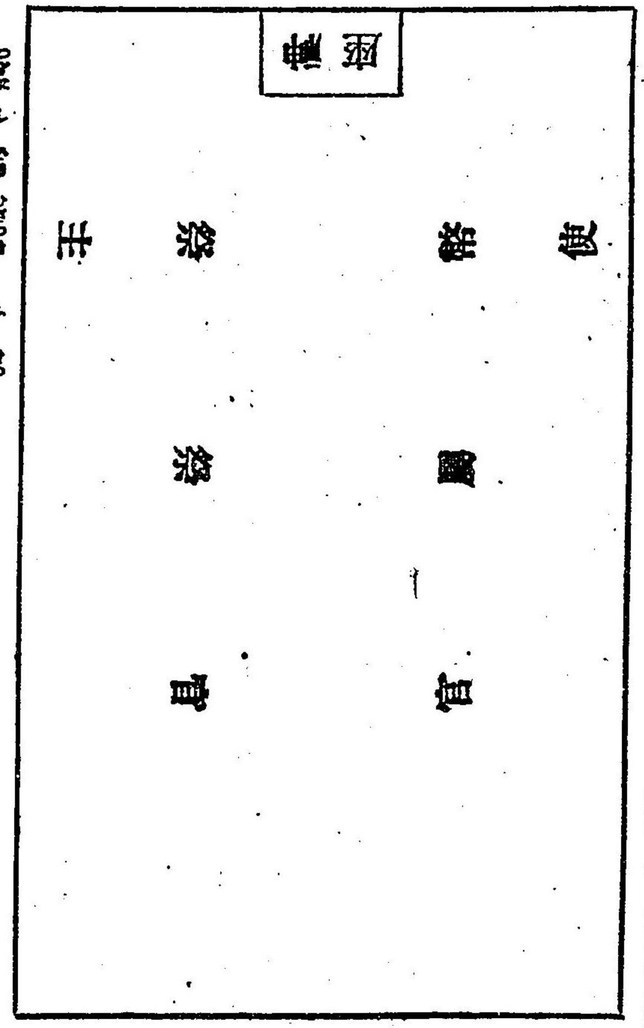
獻饌順次の圖



献饌長は、献饌し終れば、膝退（膝歩法二）して、笏を取り出し（笏法五）神前に向ひ座揖（揖拜法一）し、起座（座法一）して立揖（揖拜法二）し、廻轉（歩法十）して本座の前に至り、立揖（揖拜法二）し座前着座（座法七）にて着座し、座揖（揖拜法一）す。

手長は、献饌終れば笏を懷中より取り出し（笏法五）て、坐揖（揖拜法一）し、下座の者より始め、起座（座法一）し立揖（揖拜法二）し、廻轉（歩法十）して本座の前に至り、立揖（揖拜法二）し、座前着座（座法七）にて着座し、坐揖（揖拜法一）す。

献饌終れば、これより奉幣式となるこのときの位置は左の如し。



●（七）次、後取軾を布設す。

作法、祓式（四）（五頁）に同じ。但し軾は、神饌案四五歩前の正中に布設す。

◉(八)次、奉幣後取奉幣司に渡す。

後取軾を布設し終れば、奉幣司は坐揖(揖拜法一三十一頁)して起ち(座法一十五頁)立揖(揖拜法二三十一頁)して神前の軾の前に進み、深揖(揖拜法四)して、左足より先に坐し、又深揖(同上三十三頁)して、後取の奉幣を持ち來れるかに留意す。後取は、先に奉幣司の起座したるときに、直に坐揖(揖拜法一三十一頁)して座を起ち(座法一十五頁)立揖(揖拜法二三十一頁)し、進みて幣所に至り着座(座法二十六頁)し、懐笏(笏法五十四頁)して幣を執り、坐揖(揖拜法一三十一頁)して起ち(座法一、三十五七頁)進みて鍵を持ちたるときの如く、奉幣司の前三歩の所に斜に坐し、膝行(膝歩法一二十九頁)して、幣を奉幣司に渡す。この渡すときの作法は、鍵の渡方に同じ(祭祀式三十二頁)渡し終れば、三歩膝退(膝歩法二十九頁)し、懐中より笏を出し(笏法五十四頁)坐揖(揖拜法一三十一頁)して起ち(座法一十五頁)立揖(揖拜法二三十一頁)し、三歩退き廻轉(歩法三、九二十三頁)して、本座の前に至り、立揖(揖拜法二三十一頁)し、座前着座(座法七十八頁)にて着座し、坐揖(揖拜法一三十一頁)す。

◉(九)次、奉幣行事。

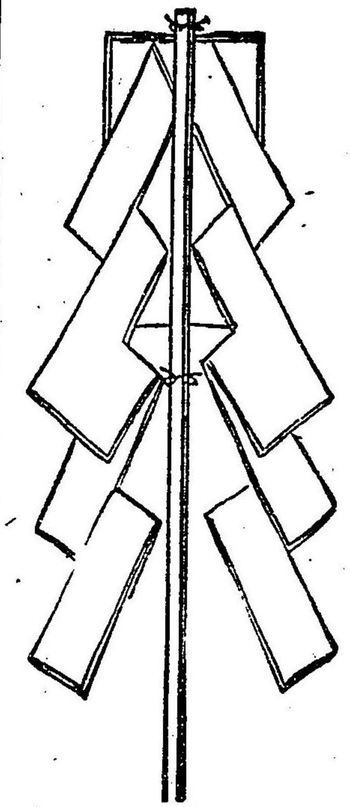
奉幣司、後取の渡す奉幣を、鍵を受取るときの如き作法にて受取り(第一圖)終れば、座揖(揖拜法一三十一頁)して起ち(座法一、三十五七頁)軾の上を左右左と進み、幣を持ち代へ、目の前にて、正しく右手を上に、左手を下にして(第二圖)、左右左と、足を幣と共に動かして振る。即ち、その振る樣は、幣を左方に引き附くると共に、左足を引き、右方に引き附くると共に右足を引き、又、左方に引き附くるときは、左足を引くなり。かくして振り終れば、右足より座し、幣の正面を神前に向け代へ、左の肩に捧げ持ち、左手を下に右手を上に、幣の下部を持ち體を屈す(第三圖)。終れば、左手を上に、右手を下に持ち代へ、右足より立ち、又、初の如くす。

此くすること四度(但し、二度目の終毎に、幣の上部を體の左方に、下部を右方に引き附け、この下部を地に附け、上部即ち、幣の垂れを地と垂れと一寸明き位まで下げ、體を前に屈す。姿勢は躰形六十度位。この間に祈言を申す。)終れば、座揖(揖拜法一頁)して、幣を後取に渡す。

後取は、奉幣司の行事終らんとする頃、直に座揖(揖拜法一頁)して起ち(座法一頁)、立揖(揖拜法二頁)して進み、奉幣司の前三歩の所に斜に座し、座揖して、懐笏(笏法五頁)し、膝行(膝歩法一頁)して、幣を奉幣司より受取り(鍵受取の如くす)(祭祀式五十二頁)、三歩膝退(膝歩法二頁)して、左折をなし、神前に進み、三歩膝行(膝歩法一頁)して、幣を目の前にて正しく持ち代へ、右手を上に、左手を下にして、神前に奉り、膝退(膝歩法二頁)して深揖(揖拜法四頁)をなし、奉幣司の前に斜に座し、笏を懐

にし(笏法五頁)合せ拍手をなす。このとき奉幣司は、置笏(笏法二頁)してこれに應ず。(合せ拍手のときは、後取先に一つ拍ち、續いて奉幣司と後取と、同時に一つ拍ち、後に奉幣司一つ拍つ。)終れば、懐中より笏を出し(笏法五頁)、座揖(揖拜法一頁)して起ち(座法一頁)立揖(揖拜法二頁)し、三歩退き廻轉(歩法三、九頁)し、本座の前に至り、立揖(揖拜法二頁)し、座前着座(座法七頁)にて着座し、座揖(揖拜法一頁)す。

奉幣の圖

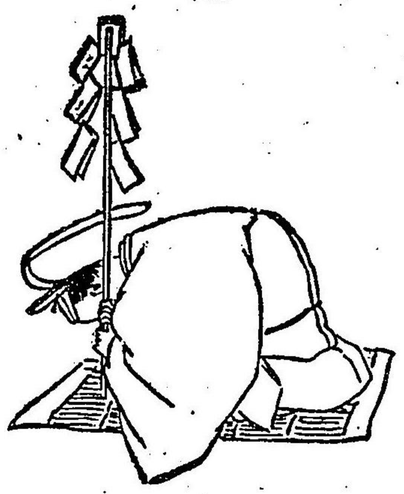


奉幣司は、合せ拍手終れば、深揖（揖拜法四三十三頁）し、軾を膝退（膝歩法二二十九頁）し て起ち（座法一十五頁）、立揖（揖拜法二三十二頁）し、三歩退き廻轉（歩法三、九二十三頁）して、本座の前に至り立揖（揖拜法二三十二頁）し、座前着座（座法七十八頁）にて着座し、座揖（揖拜法一三十一頁）す。

奉幣行事第一圖

同第二圖

同第三圖



右手上
左手下

◉（一〇）次、後取軾を撤す。

作法、祓式（六）（頁十六頁）に同じ。

◉（一一）次、後取祝詞奏上の軾を布設す。

作法、祓式（四）（頁十五頁）に同じ。

◉（一二）次、祝詞後取、祝詞を祭主に渡す。

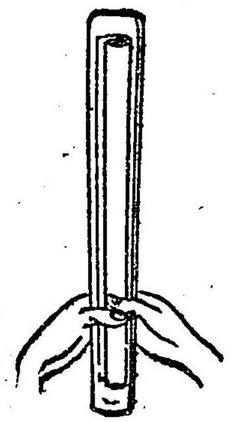
後取懐笏（笏法十四五）して、祝詞袋より祝詞を出し、左手を高く、手の甲を下に、右手を低く、手の甲を上にして持ち、座を起ち（座法十五一）祭主の左の脇の前に、斜に三歩隔りて着座（座法十六二）し、三歩膝行（膝歩法二十九一）して、祝詞を持ち代へ、右手を高く、甲を下に、左手を低く、甲を上に祭主の方に向け、祝詞の中部と下部とを持ち、祭主に渡す。祭主は、笏を出して、祝詞をその上に受取る。後取は渡し終れば、三歩膝退（膝歩法二十九一）して、懐笏を取り出し（笏法十四五）坐揖（揖拜法三十一一）し退く。起座（座法十七四）にて起ち、立揖（揖拜法三十二二）し、三歩退き廻轉（歩法三十三九）して、本座の前に至り、立揖（揖拜法三十二二）し、座前着座（座法十八七）にて着座し、坐揖（揖拜法三十一一）す。

◉（一三）次、祭主祝詞を奏上す。

後取祝詞を渡せば、祭主は、笏を出して、祝詞をその上に受取り、笏に持ち添へ、坐揖（揖拜法三十一一）して起ち（座法十五一）、立揖（揖拜法三十一一）して進み、軾の前にて深揖（揖拜法三十一二）して、軾に上り、左足より座す（座法十六二）又深揖（同上）して起拜（揖拜法三十一四）を二度し、笏を左膝に移し、祝詞を右手にて取り、懐中に入れ、笏は置笏（笏法十二二）して、拍手を二度拍ち、左手にて袵を握り、右手にて祝詞を懐より取り出し、左側に移し、祝詞の先の方を高く掲げ、左手にて祝詞を開き、二つに折り（右手を上に、左手を下に）、膝先に出し一拜し、左右の手を以て祝詞を開き、目より少しく高く祝詞を上げ、文字を目の高さ位に下げ、正しく持ちて朗讀す。終れば、左右の手にて、祝詞を又二つに折りたゝみ、（左手を上に、右手を下に）、膝先に出し一拜し、左膝の側に移し、左手にて祝詞を疊み、終れば、直に右手にて懐中し、拍手を二度なし、把笏（笏法十三三）して左

膝に移し、右手にて、祝詞を懷中より取り出し、笏に持ち添へ、正笏（笏法十三四）をなし、起拜（揖拜法六三十三頁）を二度なし、終りて、直に持笏（笏法十五）の躰に直し、深揖（揖拜法四三十三頁）して、軾を三歩膝退（膝歩法二二十九頁）して起ち（座法一十五頁）又、深揖（同上）して、三歩退き廻轉（歩法三、九二十三頁）して、本座の前に至り、立揖（揖拜法二三十二頁）し、座前着座（座法七十八頁）をなし、坐揖（揖拜法一三十一頁）す。

祝詞を笏に持ち添へたる圖



祭主本座に還れば、後取は坐揖（揖拜法一三十一頁）して起ち（座法一十五頁）立揖（揖拜法二三十二頁）して、進み、祭主の前三歩の所に斜に坐し、坐揖（揖拜法一三十一頁）し

て、懷笏（笏法五十四頁）し、膝行（膝歩法一二十九頁）して、祝詞を祭主より受取り（鍵受取の如し）、（祭祀式二五十三頁）三歩膝退（膝歩法二二十九頁）して坐揖（揖拜法一三十一頁）し退く。起座（座法四十七頁）にて起ち、立揖（揖拜法二三十二頁）し、三歩退き廻轉（歩法三、九二十三頁）して、本座の前に至り立揖（揖拜法二三十二頁）し、座前着座（座法七十八頁）をなし、坐揖（揖拜法一三十一頁）す。

祭主祝詞を後取に渡す。

渡すときは、笏に持ち添へたるまゝにて

◉（一四）次、後取軾を撤す。

作法、祓式（上六）（同十六頁）に同じ。

◉（一五）次、後取薦を布設す。

作法、祓式（二）（同十）に同じ。

◉（一六）次、後取玉串案を据う。

作法、祓式(三)(一四十頁)の大麻案、又は、鹽湯案を据うるときに同じ。

◉(一七)次、後取玉串を祭主に渡す。

作法、祭祀式(二)(三五十頁)鍵の渡方に同じ。

◉(一八)次、祭主玉串を奉る。

祭主懐笏(笏法十四五頁)して、玉串を受取り(鍵受取に同じ)、(祭祀式(二)三十三頁)坐揖(揖拜法三十二頁)して起ち(座法十五頁)立揖(揖拜法三十二頁)して進み、神前の玉串案三歩の位置にて立揖(深揖)、(揖拜法三十三頁)し、着座(座法十六頁)して、三歩膝行(膝歩法二十九頁)し、深揖(揖拜法三十三頁)をなし、玉串を持ち代へ、右手にて、玉串の本を先にして、案上に奉る。終れば、懐中より笏を取出し(笏法十四五頁)座拜(揖拜法三十三頁)を二度、拍手(拍手法三十八頁)を二度なし、深揖(揖拜法三十三頁)して、膝退(膝歩法二十九頁)し退く。起座(座法十七頁)にて起ち立揖(揖拜法三十二頁)し三歩退き廻轉(歩法三十三、九頁)して、本座の前に至り立揖(揖拜法三十二頁)し、座前着座(座法十八頁)をなし、座揖(揖拜法三十二頁)す。

祭主總代にて玉串を献じ、以下の祭員は、座後に着座(座法十八頁)するか、又は、自座にて列拜(揖拜法三十六頁)するも差支なし。

◉(一九)次、後取玉串案を撤す。

作法、祓式(九)(一五十頁)に同じ。

◉(二〇)次、後取薦を撤す。

作法、祓式(十)(一五十頁)に同じ。

◉(二一)次、撤饌(此間奏樂)

献饌長坐揖(揖拜法三十一頁)して座を起ち(座法十五頁)立揖(揖拜法三十二頁)して神前に進み着座(座法十六頁)し、膝行(膝歩法二十九頁)し伏拜(揖拜法三十七頁)して、手長の着座し終るを待ち、懐笏(笏法十四五頁)して、饌案を両手にて取る。饌案を撤するには、最後のものを先にす。その取り方は、左手を少し

く先に出し、持方は、献饌に同じ。かくして遞次手長に渡し、手長は、起座より始め、總べて献饌長の如くす。さて渡し終れば、献饌長は、笏を出(笏法十四五)して、座揖(揖拜法三十二)し、起座(座法十五一)し、立揖(揖拜法三十二)し、廻轉(歩法二十六)して、本座の前に至り立揖(揖拜法三十二)し、座前着座(座法十八七)にて着座(座法十六二)し、座揖(揖拜法三十二)す。

手長、神饌係は、献饌長に倣ひ、順次本座に歸る。

◉(二二)次、後取饌案を撤す。

作法祓式(九)(五十一)に同じ。

◉(二三)次、後取薦を撤す。

作法祓式(十)(五十一)に同じ。

◉(二四)次、祭主、副祭主進みて閉扉をなす。後取警蹕(此間奏樂)

祭祀式(三)開扉のときの如く、座揖(揖拜法三十二)して起ち(座法十五一)立揖(揖拜法三十二)し、持笏の儘にて下座の足より進み、神前の階下にて立揖(同上)し、右足より始めて、階段を少しく斜に、左向して上り(歩法十一、十三、二十七九)終れば、椽上にて右膝を折り、少しく斜に左に向ひて着座(座法十六二)し、伏拜(揖拜法十二、三十七)し、正面に進み、起拜の再拜(揖拜法六、七、三十四五)をなし、拍手二拍(此間副祭主は少しく退きて平伏をなす。(終りて、扉の方へ膝行(膝歩法二十九一)して、懐笏(笏法十四五)し、右手を上に、左手を下にかけて、御扉を閉ぢ、膝行(膝歩法二十九一)し、錠を取り、副祭主と共に錠を下し、鍵を取り、副祭主と共に膝退(膝歩法二十九一)し、開扉のときの降階の如くして本座に歸る。

副祭主は、開扉のときの昇階の如くにし、椽上にて伏拜(揖拜法三十七)をなし、祭主の起拜拍手終れば、御扉に向ひ、膝行(膝歩法二十九一)し、懐笏(笏法十四五)して、左手を上に、右手を下に掛け、御扉を閉ぢ、祭

主と共に錠を下し、降階以下皆開扉のときの如くにして本座に復る。

警蹕後取の作法は、總べて開扉のときの如し、唯異るは警蹕の聲を、始め低く、終りを高くするのみなり。

閉扉のときは、開扉と同じく、祭員一同平伏（拝法十三）をなすべし。

◉（二五）次、祭主鍵を後取に渡す。

後取、鍵を祭主より受取る作法は、祭祀式（二）祭主後取より鍵を受取るときに同じ。起座より復座に至るまで、皆これに準ず。

◉（二六）次、祭主以下退場（此間奏樂）。

祭主より先にす。各座揖（拝法二）して起ち（座法一）、立揖（拝法二）し

進行、左右折（歩法五）して順次退場す。

一五　直會式

祭主以下祭員一同、直會場に着座す。後取供物を膳に載せて箸を附し、遞次祭主以下一同に供ふ。

副祭主座揖して起ち、立揖し、進みて、祭主と斜に向ひたる直會席の中央に着席し、座揖す。後取三方に土器を載せ、副祭主の處に持ち行きて渡す。副祭主両手にて受取り、後取は、副祭主に土器を渡すと共に、直に本座に還る。左手に持ち、左側に移し、扇を右手にて持ち、三つ間位開き、土器の中を輕く三度扇く。終れば膝行して、祭主の前に往き座揖し、終りて後取より酒を受け（後取は瓶を持ち來り、又副祭主の前に出で、瓶を

把り酒を酌む。)て祭主に渡す。副祭主は、土器を祭主に渡し終り、直に本座に還る。

祭主、副祭主より土器を受取らんとするときは、置笏し、一拍して、土器を受け、酒を呑み終れば、後取より酒を受け、次座の人に渡す。次座の人も亦置笏し、一拍し、土器を受取り、酒を呑み、後取より酒を受けて、次座の人に渡す。(土器を受渡すときは、互に躰を捻りて相對面す。)此の如く、祭員皆渡し終れば最後の人の呑み終りたるとき、後取三方を以て、土器を受取り退くなり。

後取新に副祭主に土器を渡す(渡方前に同じ)。此くすること、尚一回、その二回目の終に、副祭主平伏して「御箸」と呼ぶ。このとき列座の人々、上座より順次に、膳の隅より、供物に斜に箸を立てかくるなり。

後取、又、來りて副祭主に土器を渡す。前の如く、祭主より順次に酒を供す。一同終れば、上座より箸を膳の原の位置に直すなり。

後取膳を撤す。

祭主以下一同、順次に退場す。

祭典式作法 終

祭式次第及祝詞

元始祭　（一月三日）

一　早旦神殿ヲ装飾ス

一　午前〇時祭主以下祭員祭場ニ著席

一　次　祓主祓詞ヲ奏ス

一　次　大麻行事

一　次　壇湯行事

一　次　開扉　此間奏樂　警蹕

一　次　献饌　此間奏樂

一　次　祭主祝詞ヲ奏ス

一　次　祭主玉串ヲ奉リテ拝禮　祭員列拝

一次撤饌　此間奏樂

一次閉扉　此間奏樂　警蹕

一次退出

◎この日宮中に於ては賢所幷に天神地祇御歴代皇靈を御親祭あらせらる是れ天津日嗣の本始を祝して歳首に祀り給ふ義なるが故に元始祭と稱するなり

元始祭祝詞(文例)

掛巻母恐支、某乃大神乃大前爾官位苗字名、恐美恐美母白左久、年始乃今日乃祭爾大前乎持齋回利慎敬比、奉留御食波和稲荒稲爾御酒波甕乃閉高知甕乃腹満並豆鯖乃廣物鯖乃狹物、奥津藻菜遠津藻菜、甘菜辛菜爾至留麻傳爾置足波志豆、仕奉留事乎、平久安久聞食豆、天皇乃大朝廷乎始豆、四方國乎堅磐爾常磐爾守幸閉、給比、仕奉留百官人等、公民爾至留麻傳爾、伊加志夜具波衣乃如久、立榮延志米給閉止白須事乎聞食世止、恐美恐美母白須。(神社祭式)

孝明天皇祭　(一月三十日)

一早旦神殿ヲ裝飾シ社頭便宜ノ處ニ新薦ヲ敷キ高机一脚ヲ備ヘ上ニ神籬ヲ設ク

一午前〇時祭主以下祭員祭場ニ著席

一次祓主祓詞ヲ奏ス

一次大麻行事

一次鹽湯行事

一次献饌

一次祭主遙拜詞ヲ奏ス　此間奏樂

一次　祭主玉串ヲ奉リテ拜禮　祭員列拜

一次　撤饌　此間奏樂

一次　退出

◎この日は孝明天皇御崩御の日なるを以て宮中に於て御親祭あらせられ又勅使を山陵に差遣され幣帛を奉らしめらる

孝明天皇祭詞(文例)

掛巻母。恐伎。某乃神社乃稱言竟奉流某大神乃宇豆乃御前爾。祠官祠掌等諸畏美畏美母白左久。一月三十日乃今日波志毛。掛巻母恐伎先天皇。孝明天皇能御祭爾志有禮婆。天下國中悉彌遠長久齋比祭禮乃宣給比定米給邊留廡々邇々。此乃齋場爾神籬挿榮衣御祭奉仕爾依弖。廣前爾母大御饌捧奉里弖畏美畏美母稱言竟奉良久波。先天皇乃神奈賀良母思保志立志。掟給比志大御慮乎受繼志。彌張爾張給比。萬政知給布天皇我大御伊豆乎。以夜益々爾嚴志久尊久。影面乃大國小國乃極。背面乃大縣小縣乃限。墜留事無久充足波志米。大御代乎手長乃御世乃嚴御世爾堅磐爾常磐爾守里幸閉給閉乃。畏美畏美母白須。(祝辭集)

同遙拜祝詞(文例)

掛巻母畏伎。後月輪乃山陵乎。謹美敬比恐美恐美母遙爾拜美奉良久。天津日嗣乃御隆盛乎。神隨毛守里坐氐。國中爾荒布留者無久。穩爾靜爾令在給閉乃。恐美恐美母拜美奉留止白。(廿九題祝詞作例)

祈年祭（二月　日）

一　早旦神殿ヲ裝飾ス
一　午前〇時祭主以下祭員祭場ニ著席
一　次　氏子總代等祭場ニ著席
一　次　祝主祝詞ヲ奏ス
一　次　大麻行事
一　次　撫湯行事
一　次　開扉　此間奏樂　警蹕
一　次　献饌　此間奏樂
一　次　祭主祝詞ヲ奏ス
一　次　祭主玉串ヲ奉リテ拜禮　祭員列拜
一　次　氏子總代等玉串ヲ奉リテ拜禮
一　次　撤饌　此間奏樂
一　次　閉扉
一　次　退出　此間奏樂　警蹕

◎祈年祭は二月中卯日これを行ふこと延喜式に見ゆ今は二月四日宮中に於て御祭儀あり官國幣社へ幣帛を班つ依て各地到着の後日を擇びて祭祀すべしと神社祭式にも見えたり府縣鄕村社は成るべくその府縣の祭日を一定して執行すべきなり

祈年祭祝詞（文例）

此乃所乃底津磐根爾宮柱太敷立、高天原爾千木高知旦、天乃御蔭止定奉氐、稱言竟奉留皇神乎始米、大年神、御年神、若年神乃御前爾白左久、今年二月爾御年將初止爲氐、今日乃朝日乃

豐榮登爾奉留幣帛波、由紀乃御食御酒波甕閉高知甕腹滿雙氐、大野原爾生物波甘菜辛菜、青海原爾住物波、鰭乃廣物鰭乃狹物、奥津藻菜邊津藻菜爾至留麻傳爾如横山置高成氐奉留幣帛乎、安幣帛乃足幣帛止、皇神等乃御心爾平久聞食豆、百姓乃手肱爾水沫畫垂向股、爾泥搔寄豆、取作良牟奥津御年乎、八束穂乃伊加志穂爾皇神等乃依佐志奉良婆、初穂乎婆、千頴八百頴爾奉置氐、稱言竟奉良牟止、御年皇神乃御前爾波、絹布乎、白馬白猪白鶏三種乃代爾取易備奉氐、稱言竟奉良久止白。祝詞文例上編四ノ巻）

紀元節（二月十一日）

一早旦神殿ヲ裝飾シ社頭便宜ノ處ニ新薦ヲ敷キ高机一脚ヲ備ヘ上ニ神饌ヲ設ク

一午前○時祭主以下祭員祭場ニ著席

一次祓主祓詞ヲ奏ス

一次大麻行事

一次撒湯行事

一次献饌　此間奏樂

一次祭主遙拜詞ヲ奏ス

一次祭主玉串ヲ奉リテ拜禮　祭員列拜

一次撤饌　此間奏樂

一次退出

◎この日は神武天皇御即位の日に當るを以て紀元節と稱す當日宮中に於て御親祭あらせらる

紀元節祝詞（文例）

遙々爾畏傍乃橿原能大宮仰齋奉利、我日本乃肇國知志之太御祖、神倭伊波禮彦天皇乃大御前乎、欽美敬比恐美恐美母白左久。此乃二月十一日乃今日波之毛、掛巻母恐支皇御祖乃、始米天帝位所知食志之日止、中今乃大政乃始爾當利豆座婆、此乃太御祖天皇乃廣支厚伎德澤乎、重美辱美座豆奈毛、此御祭乎興給比豆、永代乃御典止定給倍留、任、今此乃齋廼壽辭乎稱辭竟奉良久登奏須。禮代乃大御食大御酒、海川山野乃種々能物乎、横山乃如久置足波志豆、進留狀乎、平介久安介久所聞食氐、皇御孫尊乃大御壽乎手長乃大御壽止、湯津磐村乃如久、常磐爾堅磐爾齋奉利、茂御世爾幸閉給比、阿禮坐牟皇子等乎毛惠給比、百官人等、天下四方國乃公民爾至留麻傳、長久平介久守惠美幸閉給比止恐美恐美母白須。（神宮明治祭式）

同拜辭（文例）

掛巻母恐伎、畏傍橿原宮爾天下知食志之、天皇乃大靈乃大前乎、遙爾拜美祭良久止白須。（神社祭式）

春秋皇靈祭（春分日 秋分日）

一早旦神殿ヲ裝飾シ社頭便宜ノ處ニ新薦ヲ敷キ高机一脚ヲ備ヘ上ニ神籬ヲ設ク

一午前〇時祭主以下祭員祭場ニ著席

一次祓主祓詞ヲ奏ス

一次大麻行事

一次撒湯行事

一次献饌

一次祭主遙拜詞ヲ奏ス　此間奏樂

一次　祭主玉串ヲ奉リテ拜禮　祭員列拜

一次　撤饌　此間奏樂

一次　退出

◎この日は宮中に於て御歷代皇靈を御親祭あらせられ皇后皇妃皇親を御配祀あらせらる

春季皇靈祭祝詞(文例)

啼加邪里志鳥母來啼支天、咲加邪利之花毛咲久止布此頃乃今日能生日爾天皇波大宮中爾志豆躬親良皇御祖等乃大伎尊伎聖靈乃前乎齋祭利給布仁依利豆、此乃御社爾豆母、嚴乃社殿能殿内爾神籬立豆氐、掛卷母恐支皇御祖等乃聖靈乃御前乎齋奉利、遙々拜奉良久波、天津日嗣乃御隆盛乎、天地日月止共常磐爾守護給比豆、國家富足比人道進高万里、事物開進見豆、兵強久民安加良志米給閉、生座皇子等始米、天下公民乎毛守幸閉給比豆、世態彌進美仁進美都々、正志伎直支眞道乎彌益々爾明米志女給比、履行波志米給比、弘米志米給閉止畏美畏美母稱言竟奉良久止白須。(編者)

秋季皇靈祭遙拜(文例)

天皇我朝廷爾志豆齋伎祭里給閉留御代々々乃天皇命乃御靈等乃大前乎、謹美敬比恐美恐美毛遙爾拜美奉良久波、皇孫命乃大御代乎、手長乃大御代止常磐爾堅磐爾守奉里給比、生座御子等乎毛、惠給比、天下能公民乎毛平久安久守惠幸閉給比豆、萬乃産業乎令榮給比、國乃勢權乎增左志米給閉刀畏美畏美母白須。(廿九題祝詞作例)

神武天皇祭（四月三日）

一早旦神殿ヲ裝飾シ社頭便宜ノ處ニ新薦ヲ敷キ高机一脚ヲ備ヘ上ニ神籬ヲ設ク

一午前〇時祭主以下祭員祭場ニ著席

一次祓主祓詞ヲ奏ス

一次大麻行事

一次擂湯行事

一次献饌　此間奏樂

一次祭主遙拜詞ヲ奏ス

一次祭主玉串ヲ奉リテ拜禮　祭員列拜

一次撤饌　此間奏樂

一次退出

◎この日は神武天皇御崩御の日なるを以て宮中にては御親祭あらせられ又勅使を山陵に差遣され幣帛を奉らる

神武天皇祭（文例）

掛巻毋恐伎某大神乃宇豆乃大前爾。官位姓名恐美恐美毋白左久、此四月三日乃今日波。掛巻毋恐伎皇賀遠都大御祖。神日本磐余彦天皇乃大御祭日乃。百磯城乃大宮中乃神殿爾。御祭典仕奉里賜比天下國中悉彌遠長久。齋比奉里拜美奉禮乃宣賜比仰賜閉留麻々邇々。此乃齋場爾神籬立豆。恐伎也大和國那留山陵乎志。遙々爾拜美奉留止志豆。此乃我大神乃御前爾毛。大御饌捧奉里氐稱言竟奉良久波。橿原乃底津磐根爾宮柱太知立。肇國知食留御手振乎。大御手振止與曾利賜比。安布賀

世賜比。萬政知賜布天皇我大御稜威乎。彌益々爾伊可久多布止久。堅石爾常磐乎守里幸閉へ賜閉へ止。神官等諸恐美恐美母申須。（諄辭集）

同遙拜式（文例）

畝傍乃山能山下乃下津岩根爾大宮柱太敷立高天原爾搏風高知里氐肇國知志々天皇乃御陵乃御前乎謹美歡比恐美恐美母遙爾拜美奉良久波天皇我大御代乎茂御代能足御代乃常磐爾堅磐爾守奉給比大御國乃大稜威乎彌高爾彌廣爾天雲乃向伏極鹽沐乃至留限乃國々爾伊行渡志米給閉へ止畏美畏美母遙爾拜美奉良久止白す。（廿九題祝詞作例）

大祓（六月三十日　十二月三十一日）

一早旦神殿ヲ裝飾シ社頭ニ祓ノ座ヲ設ケ祓物ヲ置ク

一午後〇時祭主以下祭員祭場ニ著席

一次氏子總代等祭場ニ著席

一次開扉　此間奏樂　警蹕

一次献饌（本殿）　此間奏樂

一次祭主祝詞ヲ奏ス

一次祓戸大神降神行事　警蹕

一次献饌（祓所）　此間奏樂

一次祭主祝詞ヲ奏ス

一次祓詞ヲ奏ス

一次大麻ヲ執テ祭員以下一同ヲ祓フ

一次祓物行事

一次撤饌（本殿）　此間奏樂

一次　閉扉

一次　撤饌（祓所）　此間奏樂　警蹕

一次　祓戸大神昇神行事　警蹕

一次　祓物ヲ河海ニ送ル

一次　退出

神嘗祭

一早旦神殿ヲ裝飾シ社頭便宜ノ處ニ新薦ヲ敷キ高机一脚ヲ備ヘ上ニ神籬ヲ設ク

一午前〇時祭主以下祭員祭場ニ著席

一次　祓主祓詞ヲ奏ス

一次　大麻行事

一次　鹽湯行事

一次　献饌　此間奏樂

一次　祭主遙拜詞ヲ奏ス

一次　祭主玉串ヲ奉リテ拜禮　祭員列拜

一次　撤饌　此間奏樂

一次　退出

◎この日宮中に於て神宮を御遙拜并に賢所御親祭あらせられ又勅使を神宮に差遣され幣帛を奉らる

神嘗祭（文例）

神風乃伊勢國、百傳布度會縣乃、拆鈴五十鈴原乃、底津岩根爾大宮柱太敷立、氐、高天原爾千木高知弖、鎮坐須、掛麻久毛畏支天照座皇大御神乃神嘗乃御祭乎、今日乃生日乃足日爾仕奉良志米給布登、御使遣志幣帛奉出志、大宮中爾志天遙爾拜美

給比、且賢所乎毛御親祭良世給布皇御孫尊乃大御心乎頂爾
戴支奉里耳、社司社掌某々等齋清萬波利乍、毛是乃神社乃齋
庭乎掃清免齋串立耳、標繩引延倍耳、郷人等斗共仁遙々爾拜
美奉里耳、恐美恐美白左久、皇大御神乃見霽志坐須四方國
波、天乃壁立極、國乃退立限、青雲乃靄久極、白雲能墜居向伏須
限、青海原波棹楫不干舟艫能至留流極、大海原爾舟滿都陸氣
耳、陸奥利往久道波荷緒結堅米氐、磐根木根履佐久彌耳、馬乃
爪能至留流限、長道隙無久立續計天、狹支國波廣久峻支國波
平介久、遠支國波八十綱打掛氣天引寄留事乃如久、皇御孫尊
爾依左志奉利給比、大御命波手長乃大御命止、湯津磐邨乃如
久、雨零利風吹氣杼毛、恒爾動支坐左受、木花乃榮由流我如榮
衣坐左志米給比、阿禮座左牟皇子等乎毛惠美給比、卿等百乃

官乃人等袁、彌高爾彌廣爾、皇賀朝廷爾茂志八桑枝乃如久、令
立榮給比、天下乃公民悉爾富足比、賑比榮延耳、大御國乃權勢
乎外國々爾押張良志米給閉止、牡鹿成須膝折伏勢、鵜自物頸
根衝拔耳、開手拍上祁天遙爾拜美奉良久止申須。（祝詞字比麻那毘）

同拜詞（文例）

掛卷母恐支伊勢乃、
神宮乃大前乎遙爾拜美奉良久止白須、（神社祭式）

天長節（十一月三日）

一早旦神殿ヲ裝飾ス
一午前〇時祭主以下祭員祭場ニ著席
一次祓主祓詞ヲ奏ス
一次大麻行事

一次　盧湯行事
一次　開扉　此間奏樂　警蹕
一次　献饌　此間奏樂
一次　祭主祝詞ヲ奏ス
一次　祭主玉串ヲ奉リテ拜禮　祭員列拜
一次　撤饌　此間奏樂
一次　閉扉　此間奏樂　警蹕
一次　退出

◎今上天皇陛下の御降誕を祝ひ奉り寶祚の無窮を祈り奉る祭儀なり陛下嘉永五年九月二十二日御降誕あらせらる十一月三日は陽曆の月日なり

天長節祝詞(文例)

掛麻久毛畏支某大神乃大前爾、姓名恐美恐美母白左久、月止云布月日止云布日古曾多加禮、十一月三日乃今日波志毛、天皇乃御降誕坐都留最母米傳太久尊支日止耳、君母民毛國中悉尊美宇禮志美悅穂比都々、祝奉留賀故爾、大神乃大前爾母、御酒御食魚菜雜物乎横山乃如久置高成耳稱言竟奉良久乎、平介久安介久赤丹穂爾聞食耳、天皇乃御壽乎、足長乃大御壽止彌還若爾御還若坐志、彌健介久守護給比耳、大御代乎手長乃大御代止堅磐爾常磐爾茂御代爾幸閉給比、万乃國乃宗國奈留皇御國乃大御稜威乎彌益々爾輝加志米給比、阿禮坐牟親王諸王諸臣百官人等、天下百姓爾至留麻耳、守護惠幸閉給比耳、今日乃尊久宇禮志支御祭乎、天壤止長久久志久仕奉良

志米給閉止、恐美恐美母白須。（編者）

新嘗祭

（十一月廿三日）

一　早旦神殿ヲ裝飾ス

一　午前○時祭主以下祭員祭場ニ著席

一　郡區町村長隨員祭場ニ著席

一　隨員幣物ヲ奉ジテ祭場便宜ノ處ニ置ク

一　氏子總代等祭場ニ著席

一　祓主祓詞ヲ奏ス（幣物幷ニ神饌祭主祭員ヲ祓フコト常ノ如シ）

一　大麻行事

一　鱗湯行事（仝上）

一　開扉　此間奏樂

一　献饌　此間奏樂

一　郡區長ノ隨員幣物ヲ假ニ案上ニ置ク（案ハ臨メ便宜ノ處ニ設ク）

一　祭主幣物ヲ取テ神前ノ案上ニ供フ

一　祭主祀詞ヲ奏ス

一　郡區町村長玉串ヲ奉リテ拜禮

一　同隨員玉串ヲ奉リテ拜禮

一　祭主玉串ヲ奉リテ拜禮　祭員列拜

一　氏子總代玉串ヲ奉リテ拜禮　此間奏樂

一　幣物及神饌ヲ撤ス　此間奏樂

一　閉扉

一　退出　警蹕

◎この祭は我が國最古の儀式にして皇祖天照大神これを始め給ひ爾後歷世行はれて最重きものなり當年新に

稔りし稻穀を天皇親ら神祇に奉り給ひ御自身も聞食し又これを群下にも賜るが古來の例となれり

新嘗祭祝詞（文例）

掛卷母畏支、某神社乃大前爾、宮司位苗字名畏見畏（美母白佐久、今年新嘗祭爾御幣捧奉良志米給布、是以今日大前乎持齋麻波利皇神等乃成志幸波閉給倍留八束穗乃秋乃初穗乎、御饌御酒爾仕奉利、鰭乃廣物鰭乃狹物奥津藻葉邊津藻菜、甘菜辛菜爾至留麻豆爾置足波志豆奉留事乎、平良氣久安良氣久聞食豆、天皇乃大朝廷乎始豆、仕奉留百官人等、四方國乃公民爾至留麻豆、洩留々事無久守幸閉給比、立榮志米給倍止白須、事乎聞食世止畏美畏美母白須（神社祭式）

假殿遷座祭

一當日早旦本殿及假殿ヲ裝飾ス

一時刻祭主以下祭員祭場ニ著席

一次氏子總代等祭場ニ著席

一次祓主祓詞ヲ奏ス

一次大麻行事　先ツ假殿ヲ祓フ神饌祭員等常ノ如シ

一次鹽湯行事　仝上

一次開扉　此間奏樂　鼓蹕

一次祭主祝詞ヲ奏ス

一次祭員神寶ヲ執テ氏子總代等ニ附ス

一次遷座

祭主御靈代ヲ辛櫃ニ納メ祭員舁奉リ其餘ノ祭員前後

二　整列ス

一次　假殿遷座畢テ祭主側ニ候ス　此間奏樂

一次　祭員神寶ヲ假殿ニ收ム

一次　献饌　此間奏樂

一次　祭主祝詞ヲ奏ス

一次　祭主玉串ヲ奉リテ拜禮　祭員列拜

一次　氏子總代玉串ヲ奉リテ拜禮

一次　撤饌　此間奏樂

一次　閉扉　此間奏樂　警蹕

一次　退出

◎本殿遷座祭の次第は假殿遷座祭に倣ふ

假遷宮祝詞（本殿）

掛巻毋恐伎、吾大神能大前爾、恐美恐美毋白久、天能御蔭日能御蔭登隱理坐須、此大宮能（葺替ノ時ニハ此間ニ「上葺流板能」ト云フ五字ヲ加フベシ）許々良乃年月袁經氐、自然爾朽損礙奴流袁此度新久（葺替ノ時ニハ「新久」ノ二字ヲ「葺替」ト換フベシ）仕奉流爾依氐、今日能今夕能吉日能吉夜爾、恐美恐美毋、假宮爾遷奉牟止須、此狀袁平久安久聞食氐、神隨遷幸勢登禮代能幣帛袁捧持氐、畏美畏美毋稱辭竟奉久登白。（祭文例）

假遷宮祝詞（假殿）

掛巻毋畏伎、吾大神能大前爾畏美畏美毋白佐久、大宮造功竟（葺替ノ時ニハ大宮葺終ト白スベシ）奉良牟日麻傳波、此行宮袁志豆宮止、神隨平介久安介久大座坐勢登、畏美畏美毛白。（祭

文例）

正遷宮祝詞（假殿）

掛巻毋恐伎、吾大神乃大前爾、恐美恐美毛白左久。瑞乃御殿既爾仕奉竟奴、（葺替ノ時ニハ葺替奉奴ト白スベシ）是爾依て、此某月某日能夜袁、吉日能吉夜登齋定氐、恐美恐美毋返奉良牟登須。故如此能狀袁大神乃御心爾平介久安介久聞食氐、神長柄還幸行勢登、恐美恐美毋白。（祭文例）

正遷宮祝詞（本殿）

掛巻毋恐伎、吾大神乃大前爾、恐美恐美毋白左久。天之御蔭日之御蔭止造仕奉禮流、（葺替ノ時ニハ「葺替奉禮流」ト白スベシ）瑞之御殿乎、安宮乃志豆宮止、故能如安久穩爾鎮座氐、天皇賀朝廷袁、堅磐爾常磐爾守奉里、幸奉理、天下平介久惠給閉助給閉止、大御饌太御酒乎、机物爾置足波斯天、畏見畏見毋稱辭竟奉良久止白。（祭文例）

上棟祭

一豫メ祓所及祭場ヲ設ク

一早旦祓所及祭場ヲ裝飾ス

一時刻祭主以下祭員祓所ニ着席

一次棟梁及職工等祓所ニ着席

一次郡區町村長及氏子總代工事係等祓所ニ着席

一次擂湯行事

一次戸大神降神式　此間奏樂　聲蹕

一次献饌　〃　此間奏樂

一次祓主祓詞ヲ奏ス

一次　大麻行事　此間奏樂

一次　撤饌　此間奏樂　警蹕

一次　祓戸大神昇神式

一次　各退出　更ニ順次上棟祭場ニ着席

一次　切麻散米行事　此間奏樂　警蹕

一次　降神式

一次　棟梁棟簡ヲ供ス

一次　献饌　此間奏樂

一次　奉幣行事

一次　祭主祝詞ヲ奏ス

一次　棟梁賀詞ヲ奏ス

一次　副棟梁以下槌打役等著席

一次　幣振役幣ヲ把リ祝辭ヲ唱ヘ幣ヲ振リ串ノ下ニテ盤ヲ撞ク

一次　唱文役撞音ヲ聞キテ一ノ槌ノ唱文ヲ唱フ

一次　槌打役唯ト稱シテ三處ニテ打堅メ二度

（槌打ノ式ハ二ノ槌三ノ槌共ニ同シ）

一次　郡區町村長玉串ヲ奉リテ拜禮

一次　祭主玉串ヲ奉リテ拜禮　祭員列拜

一次　氏子總代工事係等玉串ヲ奉リテ拜禮

一次　棟梁以下玉串ヲ奉リテ拜禮

一次　奉幣ヲ撤ス

一次　撤饌　此間奏樂

一次　棟梁棟簡ヲ撤シテ殿内ニ收ム

一次　昇神式

一次　退手

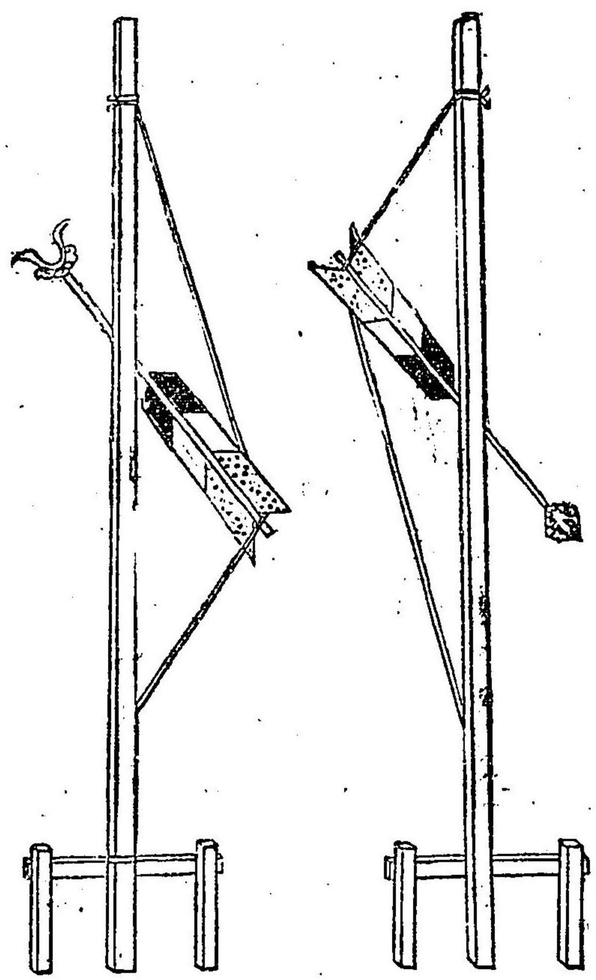
一次　退出

上棟祭用品

一神體幣　三本

此間奏樂　警蹕

幣串槍丈ケ　一丈二尺、或ハ一丈位。幣紙垂共丈長紙。圓鏡徑八寸。(三鏡)五色絹長サ各八尺、或ハ六七尺位。(三幣分)麻



一弓箭　二具

苧適宜。扇三面。(三幣分)

弓槍三寸角丈ケ　一丈二尺、或ハ一丈位。墨ニテ籐巻ヲ畫

ク。箭檜ニサ作ル。甲ノ箭ノ根、鏑。乙ノ箭ノ根、雁股。弓弦白木綿。　一本

一青和幣　一本

青麻苧。幣串檜丈ケ六尺、或ハ五尺。

一白和幣　一本

白紙。幣串檜丈ケ六尺、或ハ五尺。

一振幣　一本

白紙。幣串檜丈ケ六尺、或ハ五尺。

一幣立　三個

筒檜高サ一尺、敷板一尺餘。

一齋槌　三個

檜ニテ作ル。槌長サ八寸、廣サ四寸五分、幅三寸三分、柄長サ二尺二寸。

一同臺　三個

檜ニテ作ル。盤面長サ二尺七寸、幅一尺一寸、厚サ一寸五分。

一撞盤　一面

檜ニテ作ル。方二尺、厚サ二寸余。

一棟簡　一枚

檜ニテ作ル。長サ四尺八寸、幅上ニテ八寸、下ニテ七寸、厚サ一寸。

一八足案　四　脚（控案共）

一玉串案　二　脚（控案共）

一三方　十　臺

一大三方　二臺
一文挾　一本
一大麻　一本
一玉串　一本
一切麻　數本
白紙一枚、八刀九十六ニ切ル。之ニ玄米少許、中土器ニ容ル。
一鹽湯
土器或ハ曲物ヲ用フ
一神饌
品目　洗米、清酒、海魚、川魚、乾魚、水鳥、野鳥、甘菜、辛菜、海菜、果實、餅、鹽水、

一散饌
紅白餅共ニ三千六百五十個
一散錢
散饌ノ數ト同ジキヲ普通トスレドモ適宜

上棟祭祝詞(文例)

是乃神床爾神籬居豆招奉里齋奉留掛卷母恐支手置帆負命彦狹知命二柱乃大神乃宇豆乃大前爾。是乃神田神社爾仕奉留本居豐頴畏美畏美、母白左久。言卷母恐可禮杼。伊邪那岐命伊邪那美命二柱乃大神淤能碁呂嶋爾天降座豆。天之御柱乎見立。八尋殿袁見立給比志大御業乎受繼給比豆。汝命二柱乃奇久妙奈留御量以豆創米給比。敎閉給比志與利。現身乃人乃世止成豆毛。木乃道能工等賀。莫越山山乃岩賀根高々爾。飛驒

人▲の打墨繩乃一筋爾。大伎御稜威乎畏美仰支尊比奉里豆。三枝草乃三端四端乃殿造。彌精久彌美久成行久爾毛。尙眞木柱本乃心乎忘禮受。注連引延幣立奉里豆御祭事仕奉留手風乎。工等賀家爾毛殘志豆負々那々其形婆可里毛仕奉留慣在留波。大神乃御心爾毛然古曾宇牟賀志久聞食米。故今日乃生日爾是乃御殿乃上棟乃御祭式仕奉留止。手人等諸朝日乃豐榮登爾。群鳥伊競比參集比豆拜美奉留爾依豆神官等式乃隨々大神乃御靈乎招座奉利豆禮代乃物捧介奉利。愼美敬比治米齋比奉良久乎。美良爾廣良爾聞食相宇豆那比給閉止恐美恐美母白須。（醇辭集上）

同　賀詞（文例）

八十日波有禮杼今日乃生日乃足日爾我工匠等乃御祖神乃持齋久掛卷母綾爾畏伎八意思兼大神手置帆負大神彦狹知大神乃宇豆乃大前爾畏美畏美母棟賀乃吉詞乎白左久大大神達乃天津御量以豆事始米定米給比之規矩乃隨爾今此大神乃神殿乎之工人等我齋斧採豆大木小木乃本末打斷知齋刀以豆種々爾作里成之都々打墨繩乃速祁久仕奉禮留爾依豆言祝伎宣白左久築立留柱楹波此大神乃大御心乃鎭奈里取擧留棟梁波大御心乃榮奈里取置祁留椽橑波大御心乃齋奈里打固米多留釘根波大御稜威乃固伎那里取葺介留甍波恩賴乃廣伎那里如此言祝伎豐祝伎祝伎回之都々今日乃朝日乃豐榮昇爾工長姓名諸乃工人等乎率韋整閉畏美畏美拜美母壽詞竟奉良久斗白須

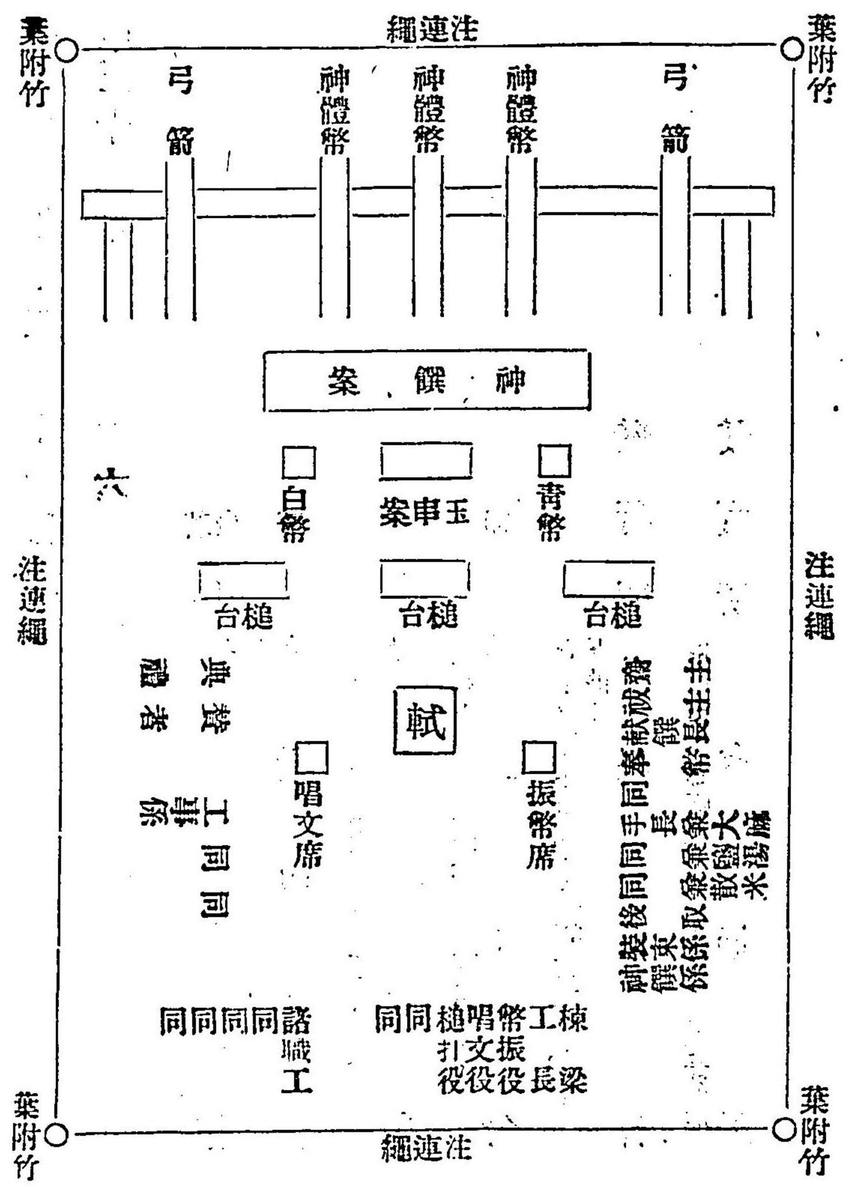
幣振祝辭

築立留柱楹波此大神乃大御心乃鎮也
取擧留棟梁波此大神乃大御心乃榮也
取置留椽橑波此大神乃大御心乃齋也

槌唱文

一之槌　天長地久千歲棟
二之槌　永遠無窮萬歲棟
三之槌　悉皆滿足永々棟

上棟祭場之圖



明治三十九年十二月十一日印刷
明治三十九年十二月十六日發行

著作兼發行者　東京府豐多摩郡千駄谷村六五五番地　神崎一作

著作者　東京市本郷區本郷五丁目廿五番地　川保嘉

印刷者　東京市神田區淡路町一丁目一番地　川越重敬

印刷所　東京市麹町區内幸町一丁目四番地　三生舍

發行所　東京府豐多摩郡千駄谷村六百五十五番地　皇學會

發賣所　東京市本郷區本郷五丁目二十五番地　通社會

014069-000-9

特23-14

祭典式作法（改定）

神崎　一作／編

M39
ABB-0325

255
52